埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立 35 年記念事業

平成 26 年度　ほるたま考古学セミナー

見えてきた!!

古墳時代の幕開け

―東松山市反町遺跡を中心に―

平成 27 年2月1日（日）

熊谷市立文化センター 文化会館（ホール）

主催 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　共催 埼玉県教育委員会

埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立３５年記念事業　平成２６年度ほるたま考古学セミナー

『見えてきた !! 古墳時代の幕開け－東松山市反町遺跡を中心に－』

開催にあたり

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団では、これまでに各種の埋蔵文化財保護思想の普及啓発事業を行ってまいりました。遺跡見学会を始め、集客施設巡回展示会「ほるたま展」や県民の日「まいぶんフェスタ」、また東京・神奈川・埼玉の埋蔵文化財関係財団連携普及事業「公開セミナー」、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との共同展示会などは、いずれも県民の皆様から多大な御支持を頂戴しております。

このたび、皆様に私どもの行ってきた調査研究の成果を御報告するとともに、郷土埼玉の歴史や文化に対する御理解をさらに深めていただく機会として、新たに「ほるたま考古学セミナー」の開催を計画いたしました。

今回テーマといたしました東松山市反町遺跡は、古墳時代前期の集落遺跡として県内最大級であるばかりでなく、全国的にも最古といえる水晶を用いた玉つくり工房、本格的な灌漑施設である堰堤（えんてい）、日本各地の系譜を引く土器などが発見されており、埼玉県における古墳時代の幕開けを探る上で重要な遺跡となっております。

今回の企画が埼玉の歴史、埋蔵文化財に対する皆様の興味・関心をより高めるとともに、広く当事業団の業務・役割を知っていただくきっかけとなれば幸いです。

本セミナー開催にあたり、講演を御快諾くださいました大塚初重先生を始め、共催をいただきました埼玉県教育委員会、御協力いただきました関係機関・各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成２７年２月

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理　事　長　　樋　田　明　男

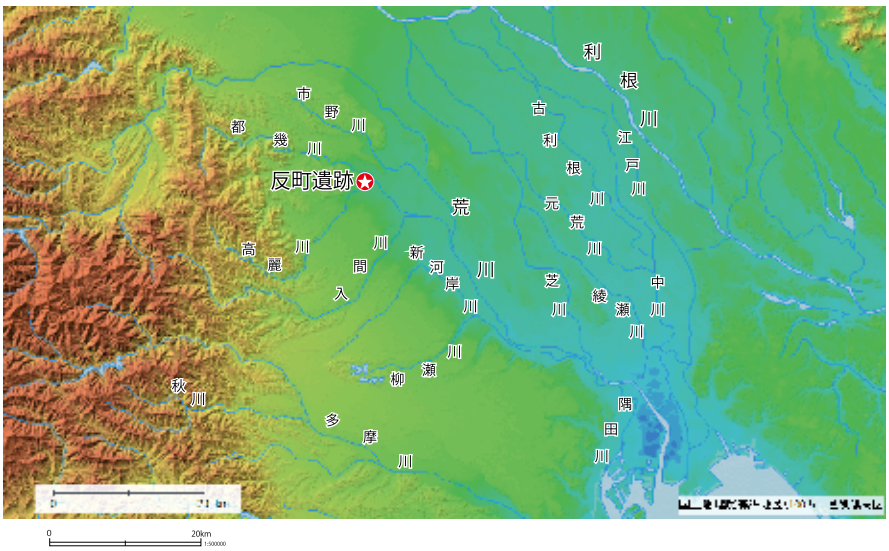
埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立 35 年記念事業　平成 26 年度ほるたま考古学セミナー

見えてきた!! 古墳時代の幕開け ―東松山市反町遺跡を中心に―

日　時　平成 27 年２月１日（日）　10:00 から
場　所　熊谷市立文化センター　文化会館（ホール）　熊谷市桜木町２－３３－２
主　催　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
共　催　埼玉県教育委員会

開催日程

10:00 ～ 10:10	開会・挨拶	
10:10 ～ 10:20	趣旨説明	
10:20 ～ 11:35	特別講演「東国の出現期古墳と大和政権」	明治大学名誉教授　大塚　初重
11:35 ～ 12:15	研究報告１「古墳」	青木　弘
12:15 ～ 13:20	昼食休憩（展示見学）	
13:20 ～ 14:00	研究報告２「集落と土器」	福田　聖
14:00 ～ 14:40	研究報告３「灌漑施設と木器」	矢部　瞳
14:40 ～ 14:50	休憩	
14:50 ～ 15:30	研究報告４「玉つくり」	上野　真由美
15:30 ～ 15:50	総括「反町遺跡と古墳時代の幕開け」	赤熊　浩一
15:50 ～ 16:00	講評	大塚　初重
16:10	閉会	



反町遺跡の位置

特別講演

東国の出現期古墳と大和政権

明治大学名誉教授　大　塚　　初　重

はじめに

畿内から見た本州東部地方を「東国」といったのだが、その範囲は時代とともに多少の変化があった。今回は地帯構造線（フォッサマグナ）から東方の地域、関東地方までを東国と考えたい。日本列島における古墳の出現年代については古くから多くの議論があり、近年、前方後円墳の出現をもって古墳時代のスタートと考え、それが大和政権成立の証であり、その年代を西暦３世紀の中頃に設定するのが一般的な考え方になっている。

従来、東国の古墳年代については古墳文化発祥の地である畿内から遙かに遠い東国に文化が伝播する経過時間が半世紀から１世紀にもわたり、古墳年代を約１世紀新しく見るのが常識であったが、現在ではその年代観は否定されている。

列島の古墳出現年代

現在、ほとんどの考古学研究者は列島最古の典型的な前方後円墳は？と問われれば、奈良県桜井市の箸墓（箸中山）古墳と答えるであろう。私も同感であるが異論が全くないわけではない。箸墓古墳を含む「大和（おおやまと）古墳群」の中には崇神・景行陵をはじめ衾田陵など宮内庁管理の天皇陵があり未調査古墳の多いことも事実である。

近年、土器の型式学による編年とＡＭＳ※などによる放射性炭素 14 の年代測定が進み、箸墓古墳の築造年代を西暦 240 ～ 260 年頃とする年代観が提起されている。しかし、この年代論が確定的であるとはいえず、なお論争は続くものと思われる。

箸墓古墳の年代が 250 年前後に落ち着くとすると、西暦３世紀の中頃は古墳時代となり邪馬台国の時代は弥生時代ではなく古墳時代に入ることになる。３世紀の中頃は大和政権の成立期ともなり、日本古代国家成立論に重大な影響を与えることになる。

箸墓古墳の登場する桜井市の纒向地区には「纒向型前方後円墳」とよぶ石塚・勝山・矢塚・東田大塚・ホケノ山などの諸古墳が分布している。橿原考古学研究所や桜井市の調査によって、この纒向型前方後円墳は箸墓古墳より先行することが確実である。やや不整形の前方後円墳とはいえ 80 ～ 90 m級の墳丘を有している点からも、私は古墳として考えたい。つまり大和における古墳の出現年代は３世紀前半にまで遡りうるということである。

３世紀前半から中頃にかけて、畿内周辺および瀬戸内・山陰・北陸をはじめ広汎な地域で弥生墳丘墓が登場する。倉敷市楯築弥生墳丘墓をはじめ島根県西谷墳丘墓群、徳島県萩原墳丘墓、兵庫県綾部山 39 号墓など、多くの弥生時代後期の墳丘墓が確認されている。いまや各地に存在する弥生墳丘墓を社会的な基盤として、地域的な特性を現出しながら前方後円墳や前方後方墳として各地に姿を現すのであろうと思う。

古墳出現前夜の土器の移動

弥生時代の中期後半頃からの現象として列島内の土器の移動、交流現象がある。石野博信氏らがすでに指摘しているように纒向遺跡への東海・関東・北陸・山陰・瀬戸内地域の土器の到来が注目される。弥生終末期における外来系土器の移動は、その背景に人・物・情報の激しい動きを連想させ、社会的な新しい胎動をつくり出すエネルギーになったのではないかと思う。

東国における土器の交流現象については、西遠江・東遠江をはじめ東海地方や日本海沿岸の北陸地方の土器の流入が認められる。最近ではさらに駿河地方の土器が関東から南東北地方にまで流入している現象が指摘されている。

※ AMS…加速器質量分析（Accelerator Mass Spectrometry）

これまでに神奈川県綾瀬市神崎遺跡（環濠集落）での西遠江の山中式土器の出土、東京都新宿区下戸塚遺跡（環濠集落）における東遠江の菊川式土器の出土をはじめ、埼玉県東松山市反町遺跡の調査では、東海系・北陸系をはじめ畿内系などの外来系の土器が出土していて注目されている。

一方、こうした東国における弥生時代後期後半期から古墳出現期にかかる墳丘墓の発見が、古墳出現論にとって問題になってくる。

すでに千葉県市原市神門３・４・５号墳における畿内・東海系土器の出土と編年的な位置付けは、東国における古墳出現論に重要な問題提起となった。神門古墳群はいわゆる纒向型の前方後円形を呈していることから、奈良県纒向古墳群との関係がさらにつみ重なって注目を浴びた。つまり畿内の庄内式土器が示す同年代に東京湾東岸の沿岸地域に墳丘墓が出現することの意義が問題となるのであった。

また千葉県木更津市の高部 30 号・32 号墳とよぶ前方後方型の墳丘墓が調査され、東海系の土器とともに破砕された後漢鏡が出土した。これらは斜縁半肉彫四獣鏡と斜縁二神二獣鏡であって、前期古墳出土の三角縁神獣鏡の配布以前に入手した鏡と思われる。

静岡県沼津市高尾山古墳の最近の調査では約 60 mの前方後方墳の木棺直葬から鉄鏃・槍先・鉇・勾玉とともに斜縁半肉彫獣帯鏡の破砕鏡が出土し、膨大な量の葬祭用の大廓式Ⅰ～Ⅳ式土器が墳頂部や周壕から発見され、この大廓式土器の分布が広く東北南部にまで拡散している点が問題となろう。

いまここに揚げた千葉県や静岡県の墳丘墓（古墳）のほかに、長野県松本市の弘法山古墳も東国の古墳出現期には問題となる遺跡である。

墳丘長約 60 mの前方後方墳であるが、竪穴式石室から鉄製農具・刀剣・鉄鏃などと斜縁二神二獣鏡が出土し、墳頂部から多量の土師器が発見された。これら数十個の土器は勿論、葬祭用に供献されたものであるが、その多くが尾張・美濃地方に関係の濃い土器であり、赤塚次郎氏によれば廻間Ⅱ式土器に属するという。最近の年代観によれば３世紀前半期といわれている。先述した沼津市高尾山古墳の大廓Ⅰ式土器が 230 年頃と考えられており、後漢鏡を伴う前方後方墳（墳丘墓）が、３世紀前葉段階に東国に出現していることになる可能性がある。

埼玉県東松山市高坂では先年、三角縁神獣鏡が発見されて話題となったが、古墳時代前期に関係する遺物であり、埼玉県における出現期古墳はこの鏡より一段階か二段階は遡るのではないかと思われる。

反町遺跡と埼玉の出現期古墳

反町遺跡の数次にわたる発掘調査の成果は、埼玉県における古墳出現期に関係する遺跡として極めて重要である。

数次にわたる反町遺跡の調査では古墳時代前期、布留式土器の時期に該当する竪穴式住居跡が 160 軒以上も存在し、さらに水晶製勾玉の工房跡やガラス小玉の鋳型を出土する玉作り工房跡の発見から、東松山市を中心とする比企丘陵の前期古墳を現出させた拠点的な集落遺跡の存在を考えなければならない。

東国各地における古墳出現期から古墳時代前期に及ぶ集落遺跡の規模や性格、そして集落の継続的なあり方は一様ではなく、地方や地域によって区々である。地域社会の発展の度合や歴史的性格についても、全国的に同一パターンというわけではない。

古墳出現期の墳丘墓についても墳墓としての基本的な性格は勿論、維持しているけれども、被葬者の性格や地域社会の発展度や地域の特性を現出した墳墓となっている。

埼玉県における古墳の出現については比企地方はその中核地であると思われ、例えば吉見町三ノ

耕地遺跡の１・２号前方後方型周溝墓や吉見町山の根前方後方墳などは、埼玉県における出現期古墳として注目されている。その年代論については出土土器の内容によって、山の根古墳を先行させるのか、三ノ耕地遺跡の２号墳などを最古例と見るのかは土器型式の捉え方にもよる。前方後方型周溝墓から前方後方墳への発展段階を認めるとすれば三ノ耕地１・２号墳が先行し、山の根古墳出土土器の型式が東海地方の廻間Ⅲ式併行だとすると、山の根古墳の年代の方を古く考えることになると思われる。

この問題は近年、各地で弥生時代終末期から古墳出現期の墳丘墓の調査例が増加するにつれて、畿内先進地域から各地へ順次、造墓活動が波及したとする従来の解釈論とは必ずしも一致しない。４世紀に入る典型的な大型前方後円墳の出現などの大和政権の政治的な支配に関係するような歴史的な現象とは性格が異なるものと思われる。

畿内地方における 200 mを超す大型前方後円墳の継続的な形成が見られる奈良県桜井市から天理市にわたる大和古墳群の出現に先がけて、東国においても墳丘墓あるいは前方後方型墳丘墓が出現していることは確実なことを思わせる。

埼玉県においても反町遺跡の五次に及ぶ調査によって、弥生時代後期末以来、東海系・北陸系・畿内系および中国地方系のいわゆる外来系土器が出土しており、それらの地域からの住民たちの移動・流入があったことは間違いなく、２世紀から３世紀代の時期に、列島内の各地から東国、とくにこの埼玉の地にも移動・移住があったことは確実である。それらの外来系土器の多くは在地の埼玉の粘土を用いて作られているという分析結果があるところから、埼玉の地に根ざした移住民生活があったこととも読みとれる。そうした埼玉＝比企地方の地域社会において政治・経済上の有力者階層の社会的記念物ともいえる墳墓を営造することは十分にありうることで、大和政権形成以前に墳丘墓が存在したことは十分にありうることだと思う。

大和政権の成立を考古学的に確証しうる実証としては、典型的な墓制の枠を維持する畿内的な前方後円墳の出現であり、全国各地へ造墓の風潮が波及することは政権との政治的関係の成立であり、三角縁神獣鏡の多量の副葬事例などは、中央政権と地方首長との政治的な従属関係の動向を示すものと思われる。

畿内の大和政権の成立以前における政治的動向は、全国的な墳丘墓 ―主として方形墳丘墓が多い― や前方後方型周溝墓や前方後方墳の出現に見る如く、各地に有力な首長階層が存在し、外来系土器の移動・流入に見られるように、東国社会における地域的な情報の共有や物流による生活形態の共通現象はすでに存在していたものと思われる。

奈良県桜井市箸墓古墳出現の前段階の纒向古墳群の存在形態と性格は今後の重要な研究課題であるが、千葉県神門古墳群、高部 30・32 号墳、長野県松本市弘法山古墳、あるいは静岡県高尾山古墳などの存在は、埼玉県の出現期古墳を理解する上で重要な参考資料になると思われる。

東国出現期古墳の歴史的性格を理解する上で関連する資料を以下に提起したいと思う。

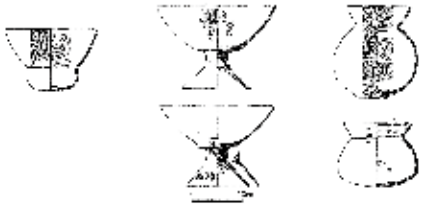
埼玉県三ノ耕地１・２号墳、山の根古墳、千葉県神門３・４・５号墳、千葉県高部 30・32 号墳、静岡県高尾山古墳、長野県弘法山古墳

これらの資料は何れも年代が３世紀前葉と考えられている墳丘墓であり、それらの多くは後漢鏡の破砕鏡を副葬されていて、三角縁神獣鏡を副葬していない。これらの墳丘墓が全国各地に存在しているように、典型的な大型前方後円墳出現直前に、中国・四国・東海・関東などにも出現していたと考えざるをえない。大和政権による一元的な支配が貫徹される前に、各地に出現期古墳＝墳丘墓に埋葬されるような人物が存在していたのであり、社会体制も激動の中にあったと理解している。

図版１

埼玉県吉見町　三ノ耕地遺跡１・２号墳

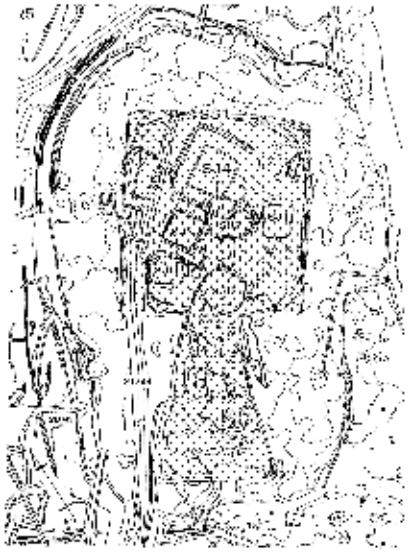
２号墳



２号墳出土土器

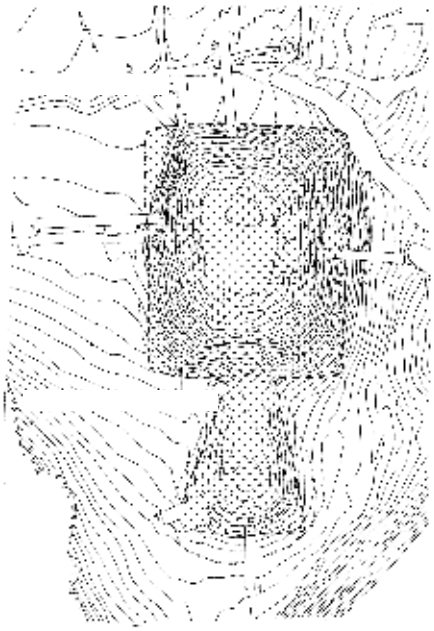
１号墳出土土器

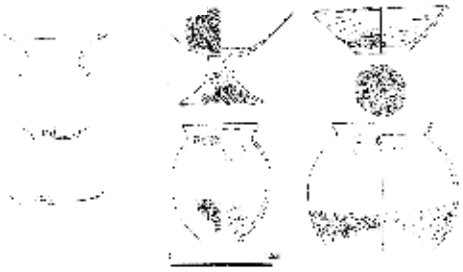
１号墳



上・下図『埼玉県立史跡の博物館紀要』第６号　2012　利根川章彦論文より

埼玉県吉見町　山の根古墳





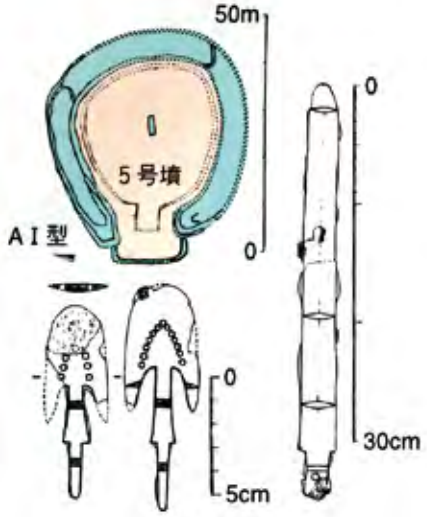
山の根古墳と出土土器

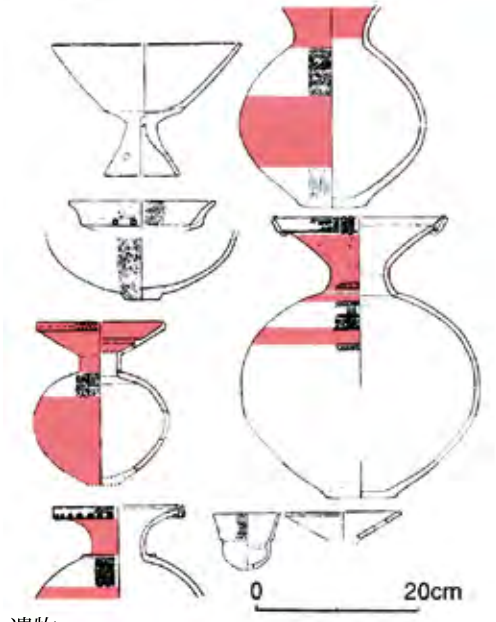
埼玉県東松山市　高坂古墳群

三角縁神獣鏡

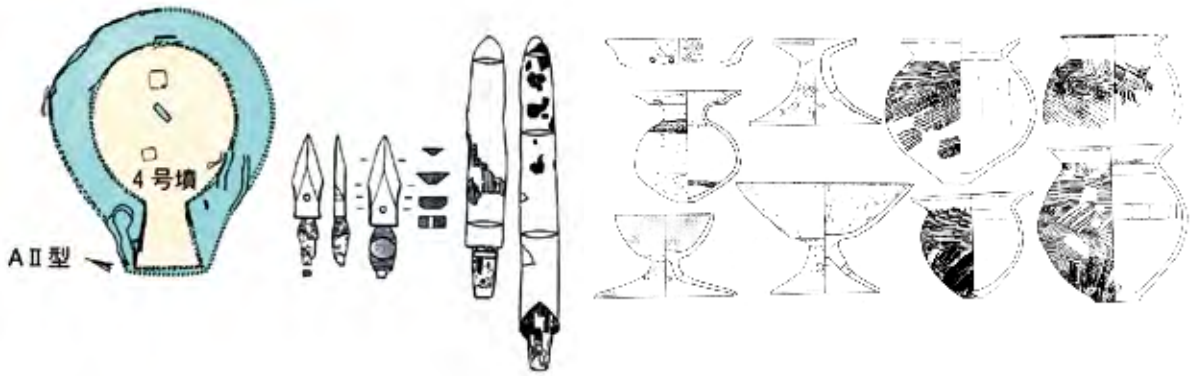
東松山市教育委員会提供

千葉県市原市　神門３・４・５号墳

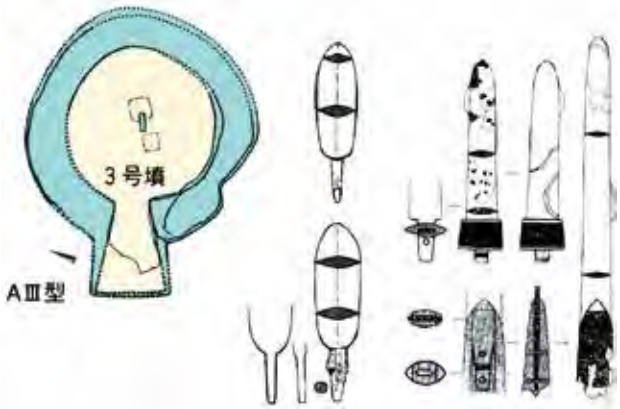




神門５号墳と出土遺物



神門４号墳と出土遺物

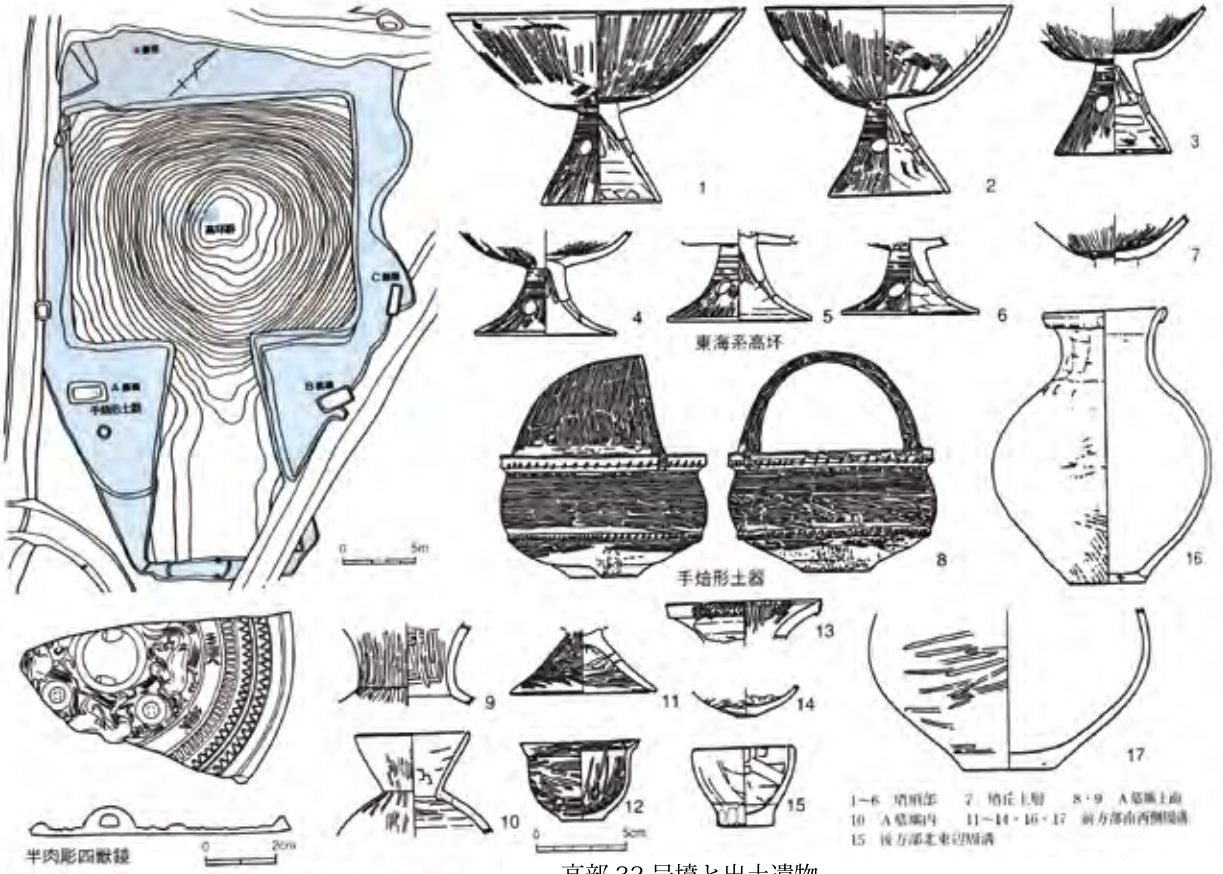


神門３号墳と出土遺物

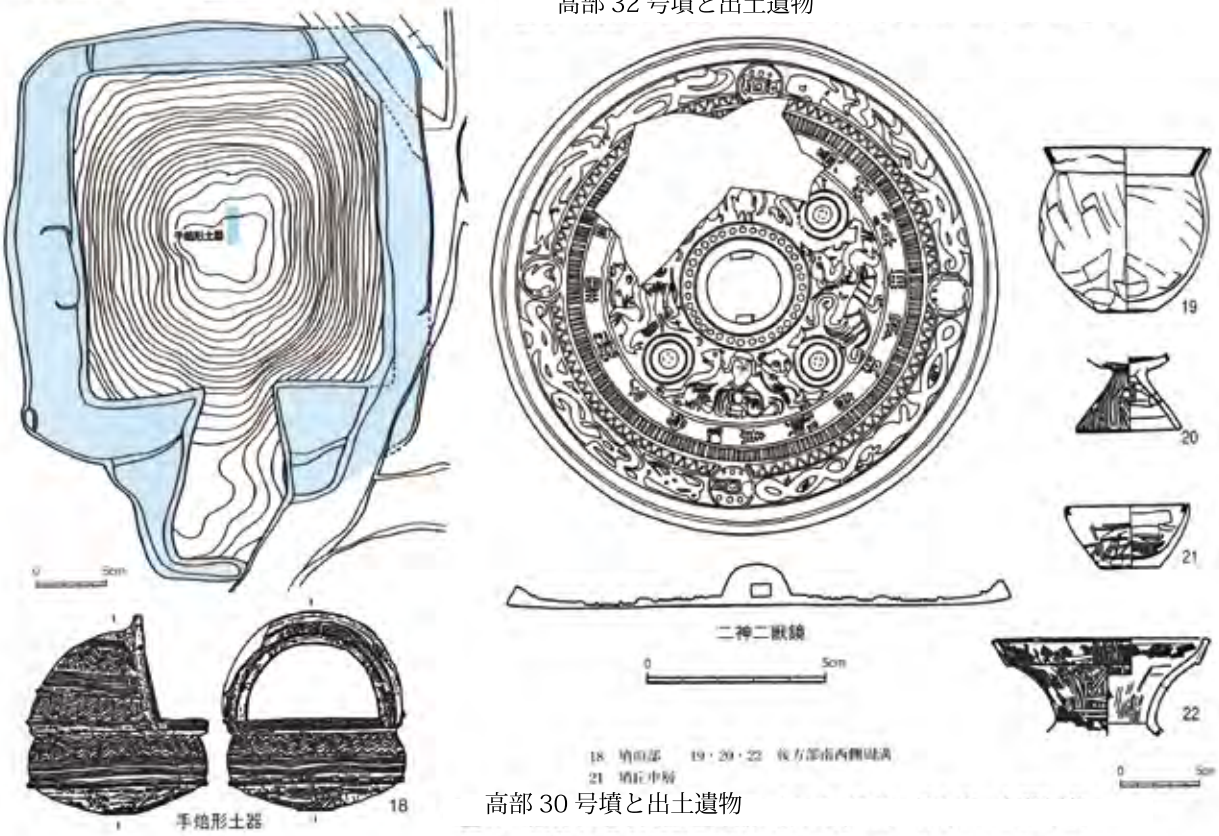
『千葉県の歴史』資料編・考古２　2003 および
『古代』第 123 号　2010　比田井克仁論文より

図版３

千葉県木更津市　高部古墳群



高部 32 号墳と出土遺物



高部 30 号墳と出土遺物

『千葉県の歴史』資料編・考古２　2003 より

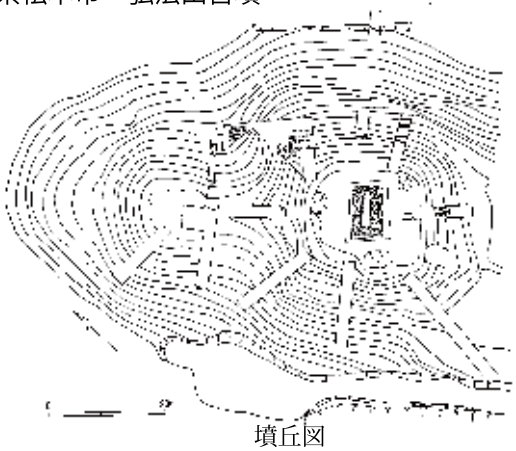
東日本における古墳出現期の副葬品

古墳名	所在地	墳形	規模（m）	副葬品 鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鉄鏃	工具
高尾山	静岡県	■	61.7	浮彫式獣帯鏡１（破砕鏡）	勾玉１	－	2	鉄鏃 32（柳葉、腸抉三角、長三角）	鑿１
東山１	長野県	■	63	浮彫式獣帯鏡１	管玉２ ガラス小玉738	1	2	鉄鏃１（柳葉） 鉄鏃24（柳葉、定角）	鉄斧１ 鑿１
高部32号	千葉県	■	32	浮彫式獣帯鏡１（破鏡）	－	－	2	－	－
高部30号	千葉県	■	34	二神二獣鏡１（破砕鏡）	－	2	－	－	－
姉崎5号	千葉県	●	(42.3)	－	ガラス小玉６	1	－	鉄鏃２（多角）	－
姉崎4号	千葉県	●	(19)		管玉31 ガラス小玉394	1	1	鉄鏃41（定角）	
姉崎3号	千葉県	●	(53.5)		管玉６ ガラス小玉103	1	1	鉄鏃２（柳葉）	鑿１

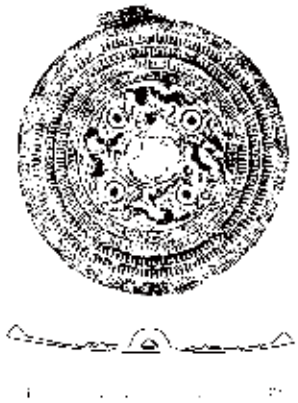
●：前方後円墳、■：前方後方墳／墳丘内の被葬施設数不詳。

沼津市教育委員会『高尾山古墳発掘調査報告書』2012　滝沢誠論文より

長野県松本市　弘法山古墳

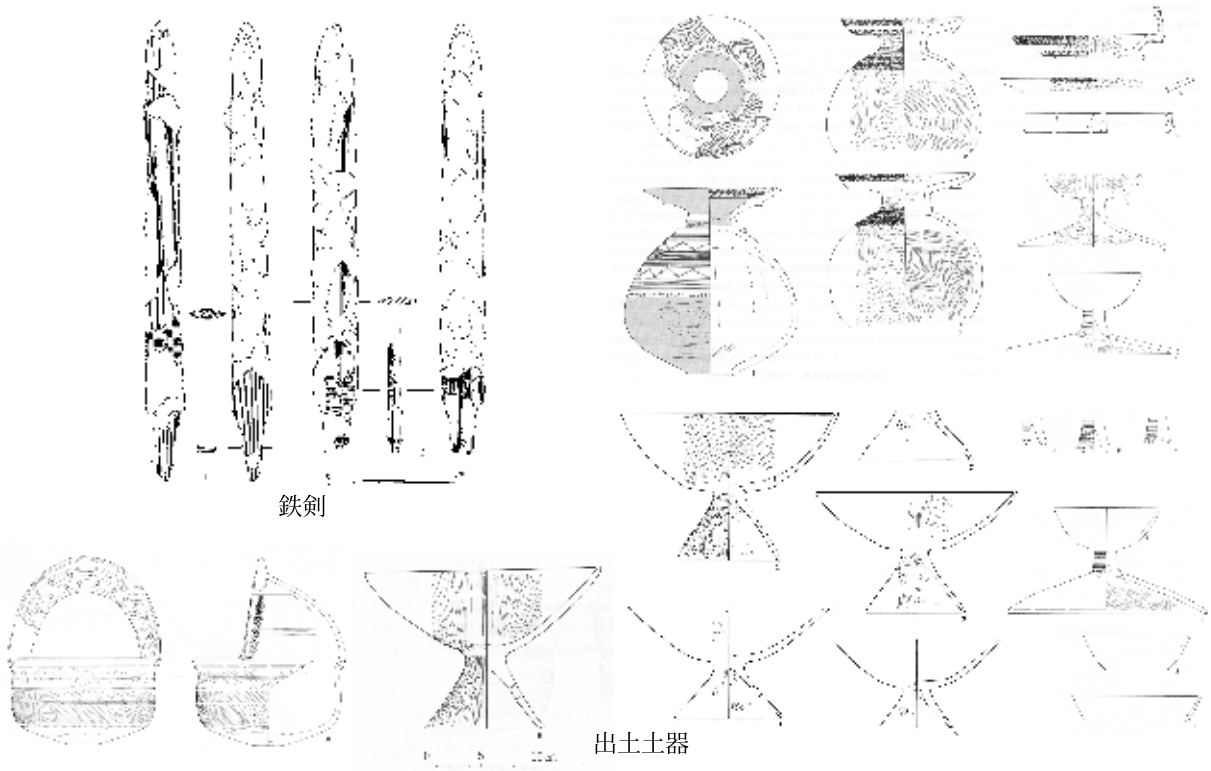


墳丘図



斜縁四獣文鏡

鉄剣

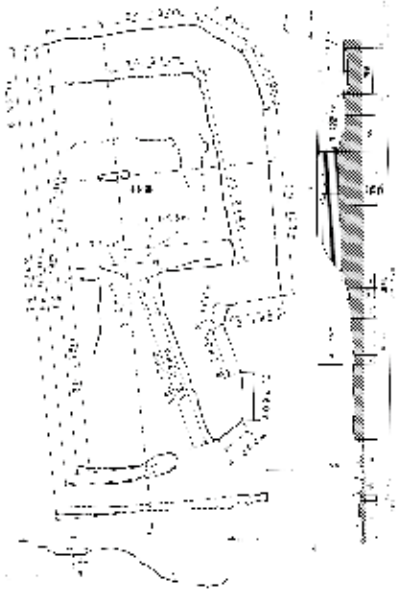


出土土器

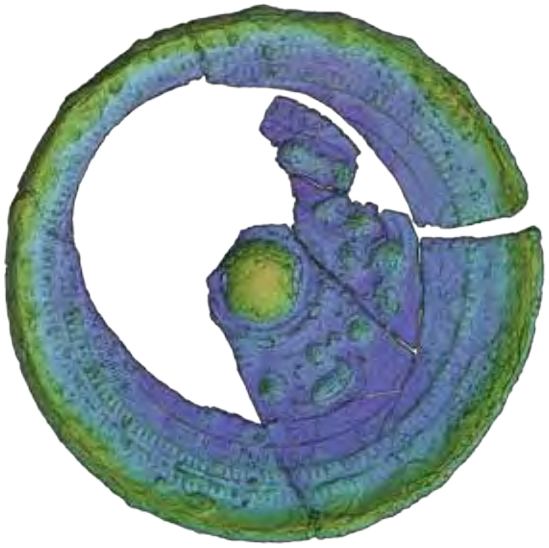
松本市教育委員会『弘法山古墳』1978
同　　『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993 より

図版５

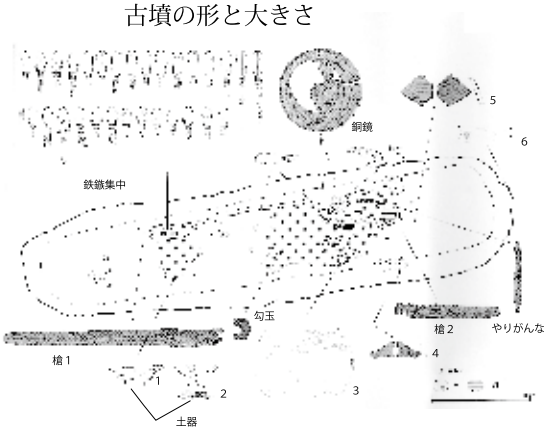
静岡県沼津市　高尾山古墳



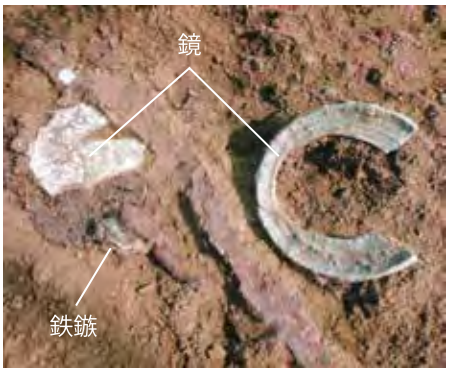
古墳の形と大きさ



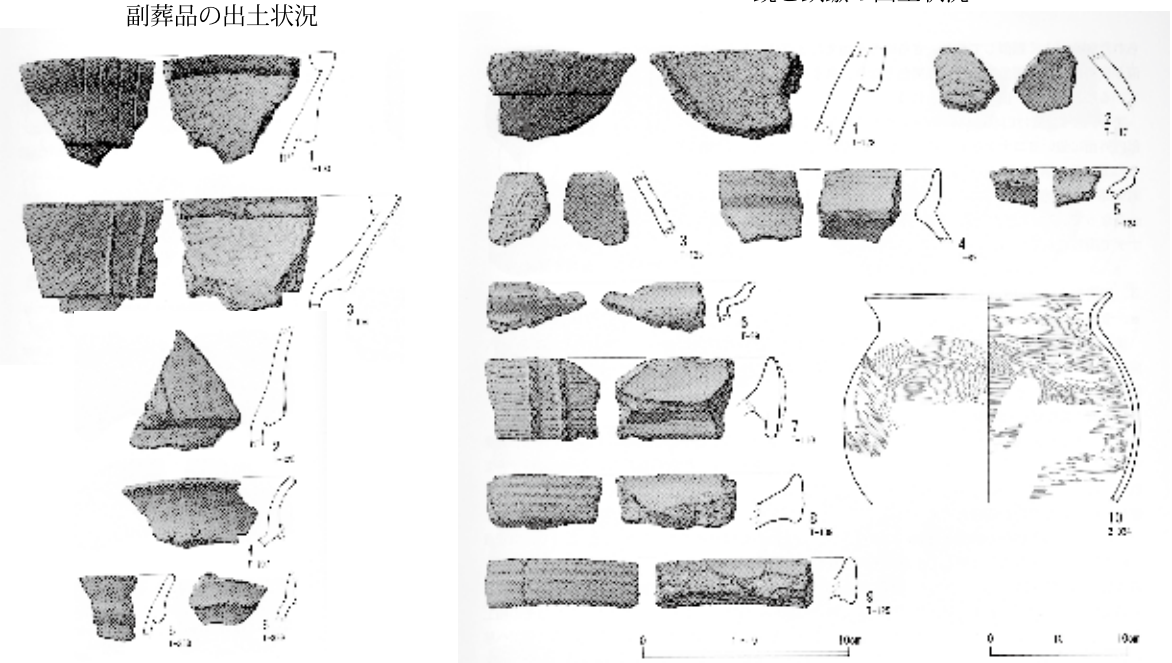
青銅鏡（上方作形浮彫式獣帯鏡）
３次元レーザースキャナによる画像



副葬品の出土状況



鏡と鉄鏃の出土状況



墳丘・周溝出土の土器（大廓式土器）

沼津市教育委員会『高尾山古墳発掘調査報告書』2012 より

兵庫県加古川市　西条 52 号墓（墳丘墓）

全景（前方後円形墳丘墓）

石室（破砕鏡出土）

石野博信氏撮影　香芝市二上山博物館提供

岐阜県美濃市　観音寺山古墳（墳丘墓）

全景

方格規矩四神鏡　径 23.6cm

重圏文鏡　径 9.5cm

美濃市教育委員会提供

徳島県鳴門市　西山谷 2 号墳（墳丘墓）

全景（北から）

堅穴式石室の構造（北から）

斜縁獣帯鏡　径 12.5cm

徳島県埋蔵文化財総合センター提供

京都府南丹市　黒田古墳（墳丘墓）

全景（南から）

埋葬施設

割って副葬された鏡（双頭龍文鏡）

南丹市立文化博物館提供

図版７

兵庫県たつの市　綾部山 39 号墓（墳丘墓）

遠景（東から）

画文帯神獣鏡　径 11cm
たつの市教育委員会提供

三重県伊賀市　東山古墳（墳丘墓）

全景（南西から）

埋葬施設と副葬品　鉄剣長さ 28.7cm
三重県埋蔵文化財センター提供

徳島県鳴門市　萩原１号墓（墳丘墓）

埋葬施設（東から）

出土遺物
長頸壺　高さ 27.2cm

画文帯神獣鏡　径 16.1cm
徳島県埋蔵文化財総合センター提供

※図版６・７は大阪府立近つ飛鳥博物館
『卑弥呼死す　大いに冢をつくる』2009 より転載

反町遺跡の概要

福　田　　聖

反町遺跡は、東松山市高坂にあります弥生時代から平安時代にかけての県内最大級の遺跡の一つで、これまでに約 43,000 ㎡を当事業団が調査しました。

遺跡は北に松山台地、南に高坂台地を見上げる低地にあり、乱流する都幾川によって形成された自然堤防上に立地しています。標高は 18.0 m前後、灰褐色のシルト、もしくは砂の中から遺構が発見されます。

調査では弥生時代中期から古墳時代前期の大規模な集落跡、水晶、緑色凝灰岩、メノウの玉製作跡、土器棺墓、方形周溝墓からなる墓域、古墳時代中期から後期の古墳群、奈良・平安時代の集落跡、平安時代の河川祭祀跡、弥生時代中期から中世までの大量の土器、木製品を包含する河川跡が発見されました。

特に古墳時代前期の住居跡は、281 軒調査されましたが、遺跡全体の約 30 パーセントにしか調査が及んでいないことから、その規模は県内最大の集落跡と推定されます。大型の住居跡が多く、軒数のみではなく、規模の点からも地域の中核的な集落であったことが分かります（福田報告）。

それに加え集落を縦断する河川跡、その河川跡を管理する堰が発見されたことや、建築部材の出土から、河川跡沿いに竪穴住居跡と掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）の存在する景観が想像されます（矢部報告）。

出土遺物は、コンテナ 500 箱に上る大量の土器が中心です。東海東部、東海西部、畿内、北陸、各地の系譜を引く土器が多く、特に大廓（おおぐるわ）式土器などの東海東部からの搬入品があり、人の往来のあったことが想定できます（福田報告）。

河川跡からは農具、工具、容器、建築部材などの多くの木製品も出土しています（矢部報告）。中でも臼は関東地方では唯一全体の形の分かる貴重なものです。床几（しょうぎ）形の椅子などの精巧な加工は、特別な木製品の製作工房の存在を窺わせます。

土器、木製品については、土器の部品や、木製品の未製品、樹皮、製作に伴う木屑の出土から、土器や木製品を生産していたと考えられます。

また、古墳の副葬品となる水晶、緑色凝灰岩、メノウの玉製作跡や玉作関係の多くの遺物と、ガラス小玉の鋳型が出土したことを考え合わせると、様々な玉つくりが行われていたと推定されます。こうした三種類の玉つくりが行われている遺跡は、関東地方では他にありません。特に水晶製勾玉の玉作工房跡は全国で初めての発見です（上野報告）。

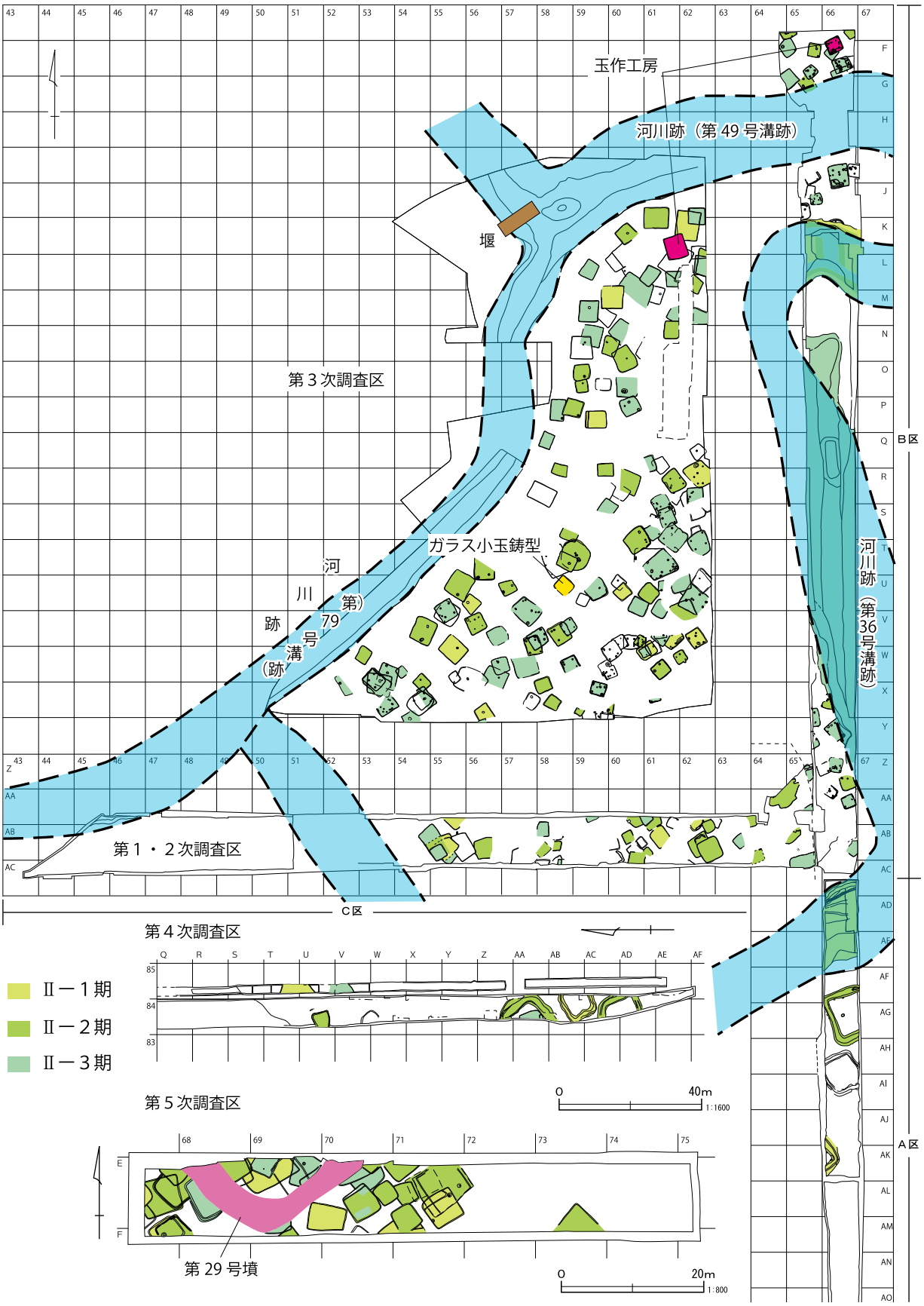
方形周溝墓は６基検出されました。その中で第８号周溝墓は焼成前底部穿孔（せんこう）土器が多く出土し、覆土中からベンガラが発見されるなど、中心的な周溝墓であったと考えられます。

また、第 29 号墳は形態から大規模な方墳の可能性もあり、同時代に周溝墓とは別の墓が存在していたことも推定されます（青木報告）。

遺跡から南側に見上げる高坂台地上には三角縁神獣鏡が出土した高坂古墳群、西側には出現期の前方後方墳、前方後円墳を含む諏訪山古墳群、北側の都幾川の対岸には墳長 115 mの大前方後円墳、野本将軍塚古墳が望めます（青木報告）。

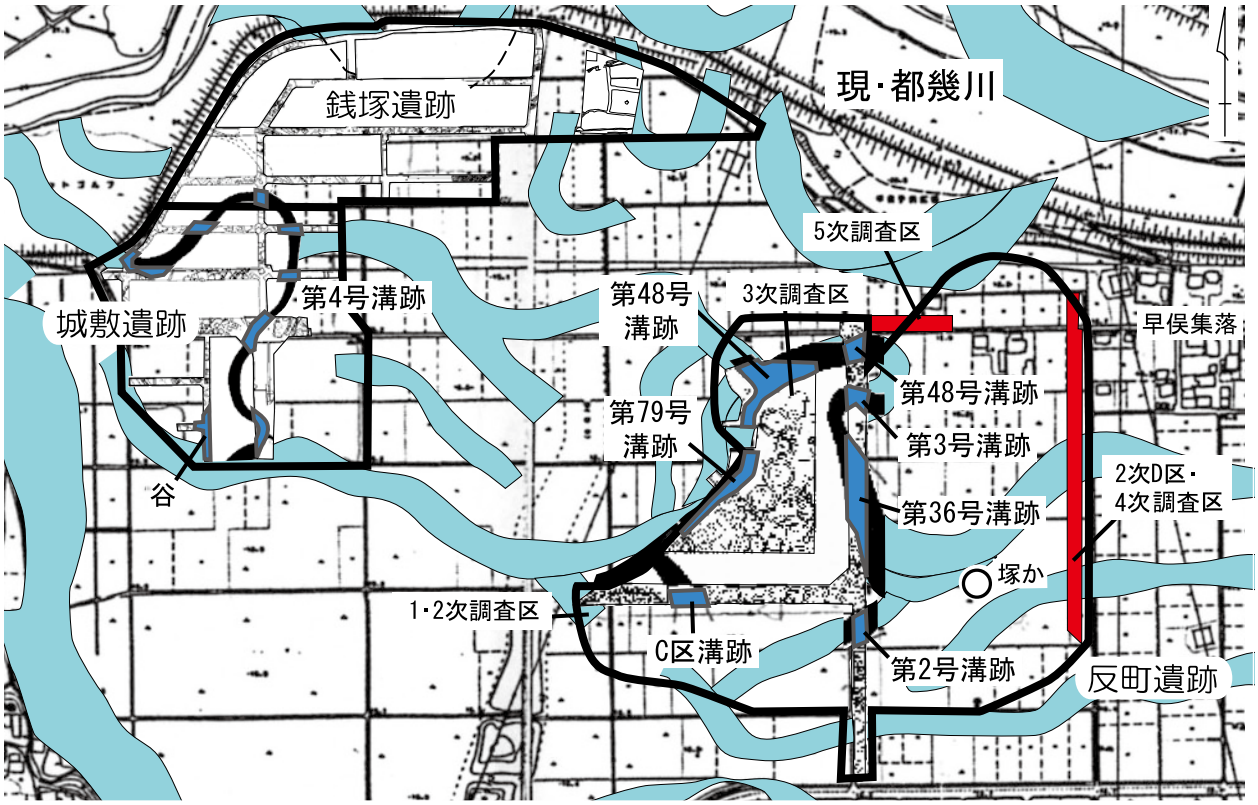
大規模な竪穴住居跡、大型の掘立柱建物からなる大集落、集落と河川を有機的に結びつける河川跡、玉製作、土器製作、木製品製作の工房が推測され、古墳に取り囲まれた反町遺跡は地域の首長と密接に関係する地域の中心的な遺跡と考えられます。

本セミナーでは、反町遺跡の発掘成果を通して古墳時代の幕開けの具体的な姿に迫ります。


玉作工房
河川跡（第 49 号溝跡）
堰
第３次調査区
ガラス小玉鋳型
河川跡（第 79 号溝跡）
河川跡（第 36 号溝跡）
第１・２次調査区
B区
C区
A区
第４次調査区
第５次調査区
第 29 号墳
Ⅱ－１期
Ⅱ－２期
Ⅱ－３期
0
40m
1:1600
0
20m
1:800

古墳時代前期全体図

周辺の空中写真（南東から）



反町遺跡周辺の推定河川流路（菊地 2009 から改図掲載）

重なり合う住居跡群（第５次調査区）

大量の土器と木器が出土した古墳時代の河川跡（第１・２次調査区）

研究報告１

古墳

青　木　　弘

埼玉の一般的な古墳観

埼玉県で古墳と言って真っ先に思い浮かぶのは、辛亥銘鉄剣（しんがいめいてっけん）が出土した埼玉稲荷山古墳を代表とする埼玉古墳群です。

古墳時代を大きく前期・中期・後期の３つに時期区分した場合、この埼玉古墳群の造営は古墳時代中期（５世紀後半）に始まります。つまり、今回のテーマとする古墳時代前期（３世紀後半から４世紀）には埼玉古墳群はまだ造られていません。

埼玉古墳群形成以前にあたるこの時期には、どのような古墳が造られていたのでしょうか。ここでは埼玉の前期古墳について考えてみます。

方形周溝墓と前方後方墳

古墳は前方後円墳や前方後方墳、円墳、方墳など墳形の違いとともに、規模の大小によって階層が存在したとされます（都出 1991）。近年では、墳丘長 280 mを誇る大型前方後円墳である奈良県箸墓（はしはか）古墳の築造（３世紀中葉）をもって古墳時代の始まりとする研究が多いです（大阪府立近つ飛鳥博物館 2014 など）。

その一方、埼玉県下の出現期古墳には前方後円墳は認められません。その代わり弥生時代から続いて造られる方形周溝墓とともに、前方後方墳の多い点が特徴です（第１図）。

前方後方墳は大別すると、「前方後方墳」と「前方後方形周溝墓」とに分けられます（第１図・表１）。両者は立地や墓域の構成、墳形に違いがあります。

古墳時代に日本列島で造られた古墳は、数万基に達します。かつて奈良県立橿原考古学研究所がまとめたデータによると、前方後円墳は 4704 基と意外に少なく、前方後方墳は 512 基と更に減少します。そのうえ、前方後方墳は 512 基中 326 基（64％）が中部地方以東の東日本に分布します（卜部編 2004）。

埼玉県でも古墳時代前期に前方後方墳が分布し、かつ他地域の土器が出土する点はこれまでの研究でも指摘されてきました（塩野 1984、高橋 1989 など）。なかでも赤塚次郎氏は前方後方墳と土器に注目し、これらが東海地方（伊勢湾沿岸部・濃尾平野）を起点に列島各地に広がることを論じました（赤塚 1992、赤塚 1996 など）。埼玉県では東海系の土器が古墳や集落から出土する事例が増加し、古墳時代前期における東海地方と埼玉との関係はさらに追及すべき課題となっています。

前期古墳の分布と立地、出土遺物

ここで埼玉県の前期古墳について概観してみましょう。第２図から第４図の古墳の変遷表と分布図を併せてご覧ください。

全体の特徴として、まず、この時期の古墳は児玉・大里・比企・入間・北足立地域に分布し、なかでも児玉地域（本庄市周辺）と比企地域（東松山市・吉見町周辺）に集中することがわかります（第２図）。東松山市反町遺跡はこうした古墳が集中する地域に位置します。

つぎに墳丘長 100m を超える古墳がないこと、埴輪の配列が認められないことが挙げられます。また、古墳の立地は台地の先端や尾根上といった見晴らしのいい所や自然堤防上など周辺の地形より高い場所につくる点が特徴的です。残念ながら埋葬主体部の明らかな事例は少なく、被葬者の副葬品や主体部の特徴ははっきりしておりません。桶川市熊野神社古墳や美里町長坂聖天塚古墳では粘土槨（ねんどかく）や木棺直葬（もっかんじきそう）の埋葬主体部がみつかっています。この例のみで一般化することは難しいですが、

過去の伝承や調査を踏まえると、埼玉の前期古墳には粘土槨や木棺直葬が多いと想定されます。

前方後方墳の集中

時期ごとにみると、３世紀後半から４世紀中葉にかけての古墳には前方後方墳や前方後方形周溝墓が多く認められます。

吉見町三ノ耕地遺跡と山の根古墳は互いに近接した位置に造られた墳墓です。三ノ耕地遺跡では自然堤防上に３基の前方後方形周溝墓がみつかっています。なかでも第１号墓は墳長 48.8 mと大きな墳丘をもちます。

近接する山の根古墳は、三ノ耕地遺跡よりも一段高い周辺を見渡すような尾根上に造られており、墳長 54.8 mの前方後方墳という更に大きな規模をもちます。

反町遺跡にほど近い所にある東松山市諏訪山 29 号墳は墳長 53 mの前方後方墳です。この古墳からは駿河地方の土器（大廓式土器）などが出土し、50 mを超える墳長をもつことからも地域の中核を成す古墳と考えられます。

三ノ耕地遺跡第１号～第３号墓と山の根古墳、そして諏訪山 29 号墳の築造順序と築造年代は、いまだ意見が分かれています。近年の土器研究と実年代論を踏まえると、３世紀代に築造された可能性もあります。今後、慎重に検討する必要がありますが、埼玉県の古墳の出現を考える上で重要な古墳といえるでしょう。

３世紀後半から４世紀前半にかけて、比企地域と児玉地域を中心に前方後方墳と前方後方形周溝墓の築造は活発になります。

反町遺跡では、方形周溝墓が古い住居跡を壊すかたちで６基みつかりました。そのなかでも第 29 号墳は、全体像は不明ですが方墳の可能性があります。

諏訪山古墳群とともに、反町遺跡の近くにある東松山市高坂古墳群では近年、前方後方墳の第８号墳から捩文鏡や碧玉製管玉、水晶製勾玉、鎗鉋が出土しました。同古墳群からは三角縁神獣鏡が表採されています。

一方、児玉地域では、志戸川右岸に南志渡川遺跡が、小山川左岸に塚本山古墳群と北堀新田前遺跡、小山川右岸に石蒔Ｂ遺跡などから前方後方形周溝墓と方形周溝墓がみつかっています。いずれも規模は 20 m前後です。４世紀中葉には鷺山古墳という比企地域に比肩するような墳長 60 mを超える前方後方墳が造られます。

比企・児玉地域以外をみると、大里地域では塩古墳群第１支群に集中して前方後方墳がみつかっています。入間地域では４世紀前葉以降、越辺川右岸に坂戸市広面遺跡、中耕遺跡、木曽免遺跡、北谷遺跡から前方後方形周溝墓や方形周溝墓がみつかっています。

前方後円墳のみられる地域

その後、比企地域では４世紀中葉から後葉にかけて前方後円墳と円墳が造られるようになります。

東松山市高坂諏訪山古墳は４世紀後半の前方後円墳と推定され、墳長も 68 mとこれまで造られてきた前方後方墳よりも大型化します。比企地域では前方後方墳の頃から連綿と他地域に比べて規模の大きな古墳を造ります。その集約とも考えられているのが墳長 115 mを誇る東松山市野本将軍塚古墳です。

県南地域では川口市高稲荷古墳が墳長 78m の前方後円墳です。この地域の古墳はみつかっている数は少ないですが、こうした古墳を含め、今後、再評価の必要な事例もでてくるかもしれません。

このような前方後円墳の築造や副葬遺物の背景には、前方後円墳を活発に造る近畿地方からの影響が想定されます。

前方後円墳のみられない地域

児玉地域では長坂聖天塚古墳や川輪聖天塚古墳、万年寺つつじ山古墳などの円・方墳が造られます。そのうち長坂聖天塚古墳は主体部と副葬遺

物の判明した希有な例で、墳頂から粘土槨３基と木棺直葬３基が検出されました。遺物には方格規矩鏡という鏡や直刀、滑石製有孔円盤といった豊富な副葬品が出土しました。

北足立地域の桶川市熊野神社古墳は墳長 38m の円墳で、粘土槨から碧玉製儀仗、筒形銅器、鏡、刀剣、玉類といった副葬品が出土しています。この地域では江川山古墳でも鏡が出土しています。

入間地域の川越市三変稲荷神社古墳は方墳ですが、だ龍鏡や石釧が出土しています。

三角縁神獣鏡の出土

2011 年、東松山市高坂古墳群で三角縁神獣鏡が埼玉県で初めて発見されました。この鏡は「三角縁陳氏作四神二獣鏡」といわれる鏡式ですが、同じ鋳型で製作した同笵鏡は現在のところみつかっていません（佐藤 2012）。

三角縁神獣鏡は古墳時代前期を代表する鏡で、現在、全国で 560 面ほど出土しています（下垣 2010）。関東地方では茨城県１面（伝）、群馬県８面、千葉県２面、神奈川県２面と群馬県に集中しています。この鏡は大和政権から配布されたという点から、近畿地方と高坂古墳群（比企地域）との関わりが推定されます。

東松山市野本将軍塚古墳の謎

野本将軍塚古墳は墳長 115 m（後円部高 13 m、前方部高８m）の前方後円墳です。本墳は築造年代が定まっておらず、この年代的位置づけは埼玉県の古墳時代を考える上で重要な課題です。

これまでの研究では、大きく４世紀とする甘粕健氏の説（甘粕 1976）、５世紀後半から６世紀初頭とする金井塚良一氏らの説（金井塚 1979）の二者に分かれています。いずれの説を採るにせよ、本墳は埼玉古墳群の成立に先立ち、比企地域に大型前方後円墳が存在したことを示す事例として、その被葬者像、築造に伴う労働力の基盤構造など重要な問題を提起しています。

近年では本墳周辺の前期古墳と集落遺跡の出土資料から、本墳が埼玉稲荷山古墳より前に築造されていた可能性が高いとする意見があります（君島編 2010、城倉 2013）。

野本将軍塚古墳の築造時期は、現状では埴輪が出土していないことから、埼玉稲荷山古墳以前としておくのが妥当と思います。

地域開発と古墳築造―反町遺跡を中心に―

古墳時代は各地で古墳の築造と、土地の開発がとても盛んに行われます。前方後円墳が最も広く分布する時期には、南は鹿児島県（塚崎古墳群）、北は岩手県（角塚古墳）まで分布し、汎列島的に古墳築造を中心とした社会が形成されていたと推定できます。古墳のような大型土木建造物が列島範囲で造られることは、古墳時代以前には認められず、この点から古墳時代は日本列島の土木技術史からみても画期的な時代といえます。

古墳を造るには土地・労働力・材料・道具とこれに関わる技術が必要です。大型の古墳になればその分、求められる質・量も大きくなります。古墳を造るためには、労働力となる人間が生活するための住まいやそれを支える生産活動が必要です。そのため、土地の開発が促進されます。古墳築造という営為を中心に土地も拓かれていくといえるでしょう（若狭 2007、坂本 2013 など）。

この視点で反町遺跡から、古墳築造と地域開発をみてみましょう。

反町遺跡では玉類を製作していた工房跡がみつかっています（上野報告）。この工房の営まれた時期には、近隣では諏訪山古墳群や高坂古墳群で古墳が築造されます。どちらの古墳群にも、墳長 50 mを超えるような、当時としては大型の古墳が造られることから、地域を治める首長がいたことが考えられます。

また、高坂古墳群では三角縁神獣鏡が出土し、近畿地方との関わりも窺われます。

その一方、反町遺跡では東海系、北陸系、畿内系などの複数の地域から搬入、あるいは伝わった

土器が出土しています（福田報告）。

反町遺跡は調査成果を未調査部分に照らし合わせると、埼玉県で前期最大の集落遺跡と目されています。そしてこの地域には当時としては大型の前方後方墳が連綿と築造されています。比企地域の古墳時代前期の大きな特徴は、墳長 50m 前後の古墳の築造が継続する点にあります。反町遺跡はこうした古墳の築造の基盤となる集落と評価できるでしょう。

ただし、3 世紀後半から 4 世紀前葉の段階では、山の根古墳と諏訪山 29 号墳のように、河川流域ごとに同規模の古墳が築造される点から、小範囲の支配領域が存在したと想定できます。これがより広範囲の領域へと拡大する契機となるのが、4 世紀後葉以降とされる野本将軍塚古墳の築造にあると考えられます。

まとめ：埼玉の古墳前期の魅力

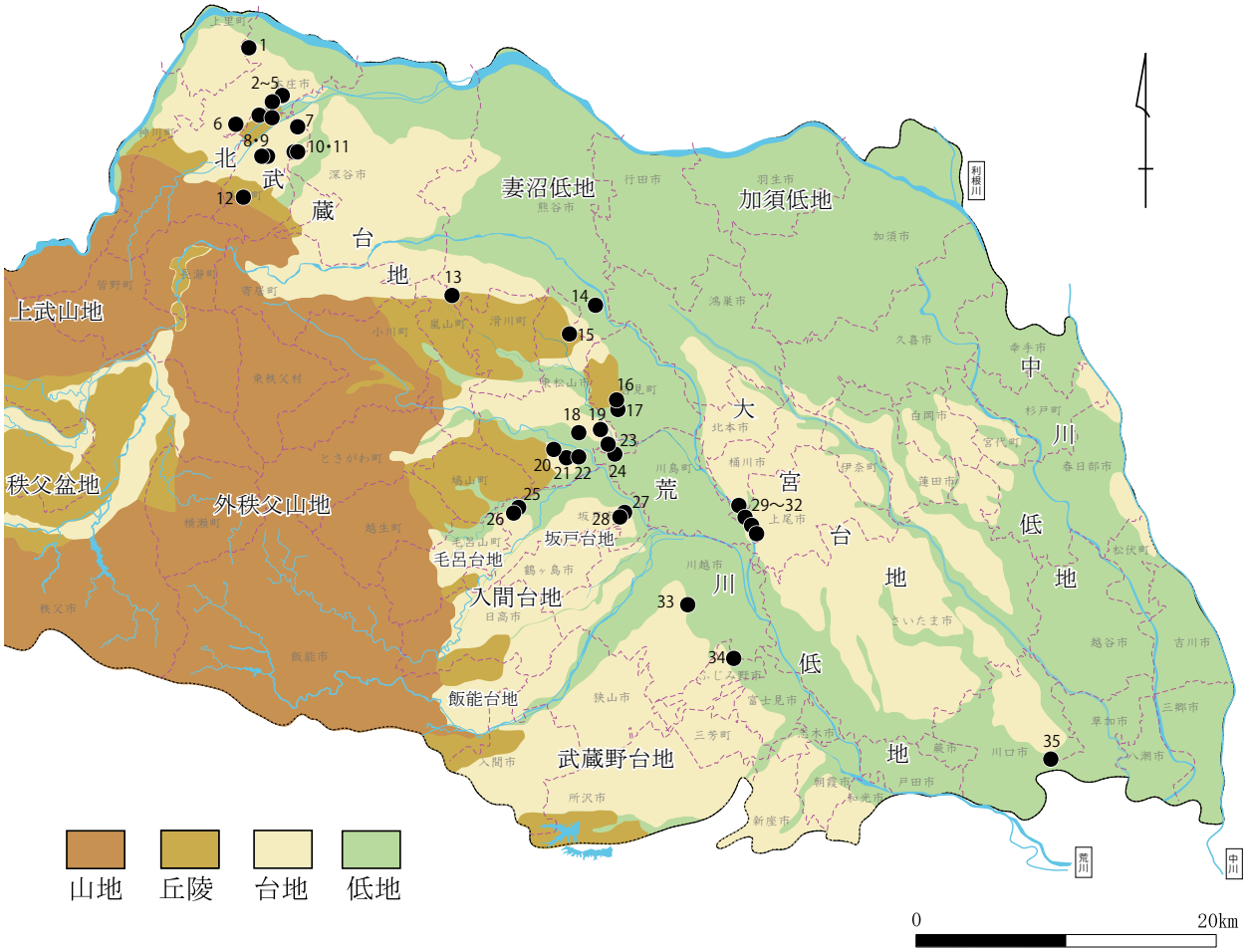
これまで埼玉県の古墳時代前期は他地域と比較できるほどの具体像も判然とせず、埼玉古墳群以降の展開に比べて地味なイメージを抱かれてきたと思います。

しかし、近年の発掘調査により、前期に関する資料はより増加し、分析視点もより多様になりつつあります。

これまでの研究成果から、埼玉県における古墳時代と古墳のはじまりは、様々な地域との交流をしつつ、独自性（地域性）を育み、後の「比企」「埼玉」「児玉」といった小地域の形成の基礎を築いていたと評価できます。今後は出現期古墳の築造時期と前方後方墳の展開について、周辺地域の成果と比較しつつ、丹念に追究していく必要があるでしょう。

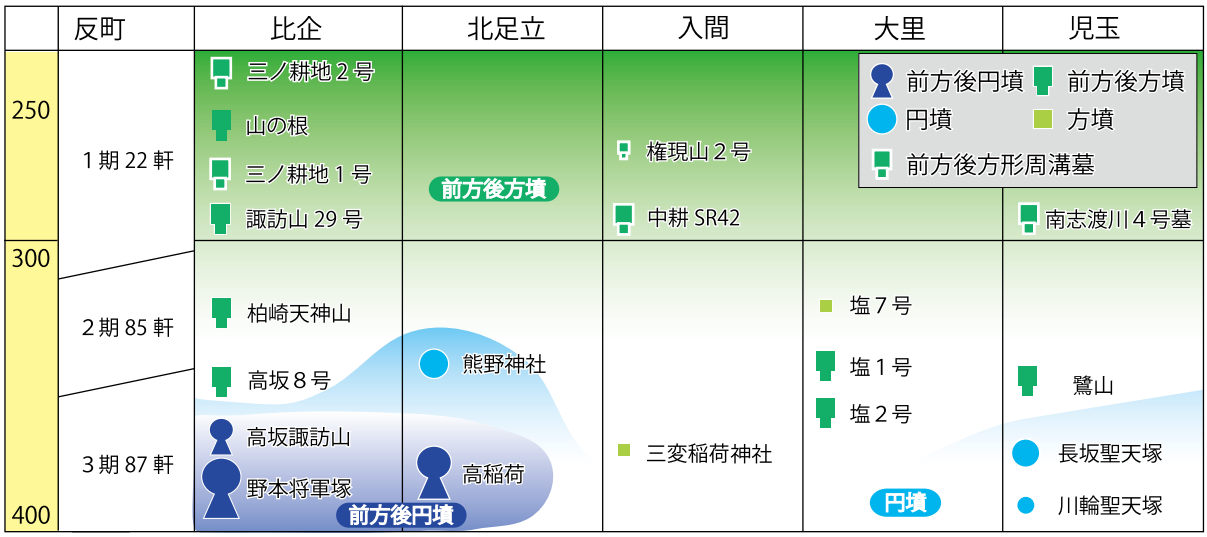
このような課題を考えていく上で、今回扱った東松山市反町遺跡と周辺の古墳の展開は、古墳築造と地域開発、そして地域間の交流を示す重要な地域像を提示していると言えるでしょう。

第 1 図　墳形用語解説



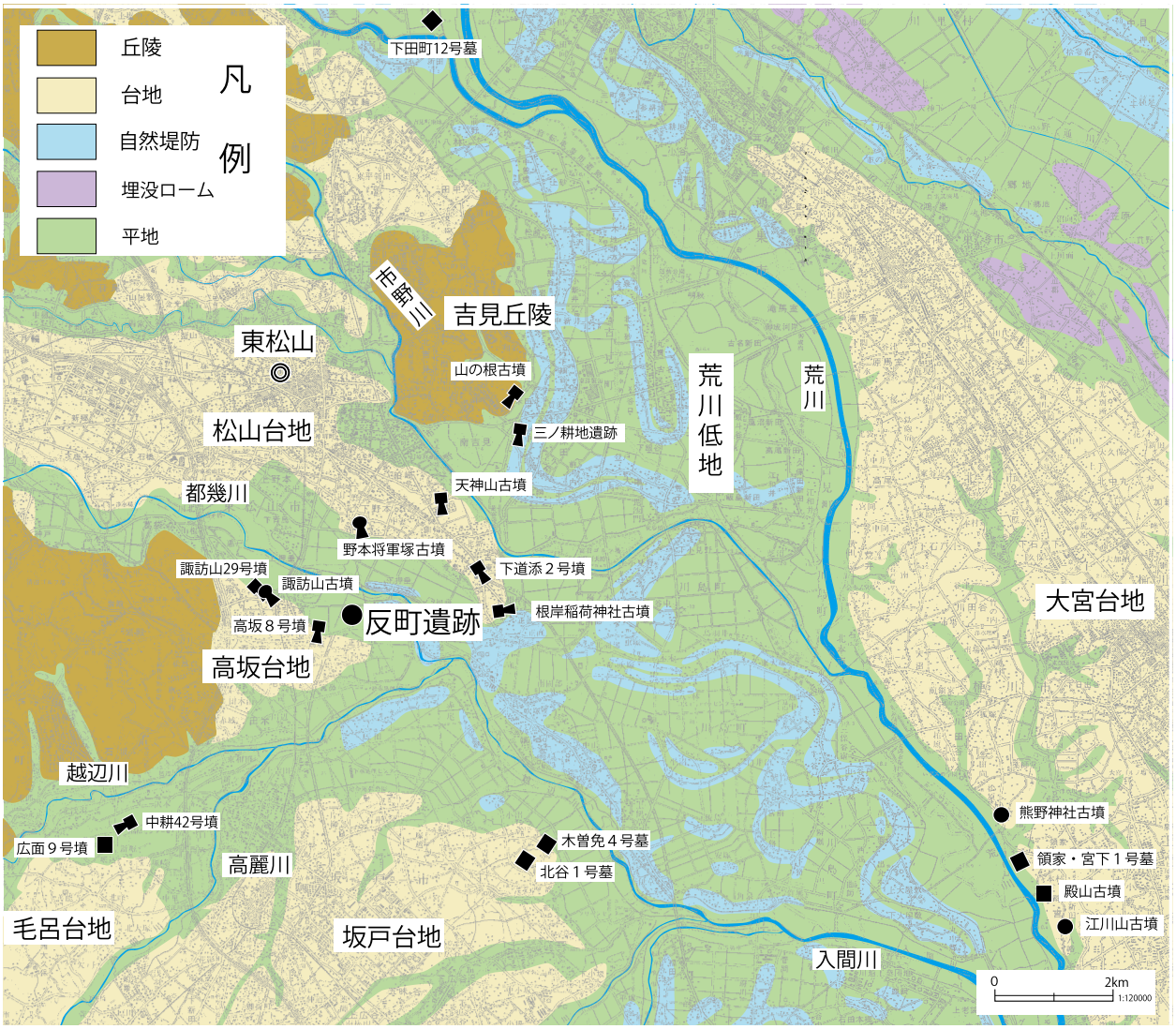
1	万年寺つつじ山古墳	10	川輪聖天塚古墳	19	柏崎天神山古墳	28	北谷１号墓
2	北堀新田前遺跡	11	長坂聖天塚古墳	20	諏訪山古墳群	29	熊野神社古墳
3	塚本山古墳群	12	中道１号墳	21	高坂８号墳	30	領家宮下１号墓
4	前山古墳	13	塩古墳群	22	反町遺跡	31	殿山古墳
5	村後遺跡周溝墓	14	下田町 12 号墓	23	下道添２号墳	32	江川山古墳
6	鷺山古墳	15	雷電山古墳	24	根岸稲荷神社古墳	33	三変稲荷神社古墳
7	石蒔Ｂ遺跡	16	山の根古墳	25	中耕 42 号墳	34	権現山２号墳
8	南志渡川遺跡	17	三ノ耕地遺跡	26	広面９号墳	35	高稲荷古墳
9	志渡川遺跡	18	野本将軍塚古墳	27	木曽免４号墓		

第２図　埼玉県における古墳の分布

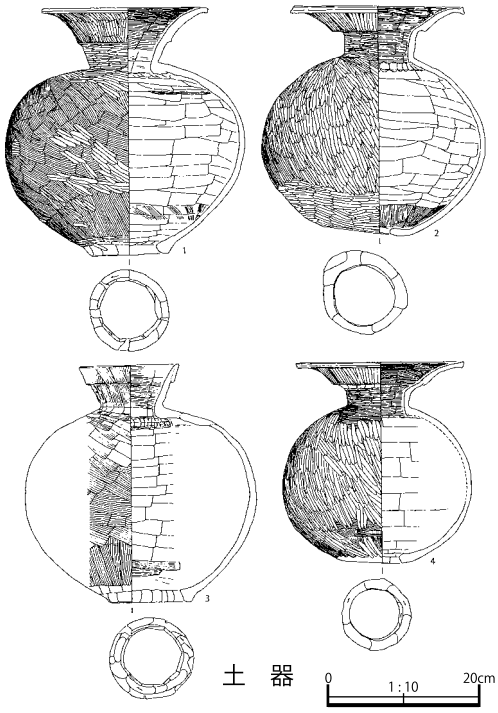


君島勝秀編　2010 『「稲荷山」出現以前の古墳』さきたま史跡の博物館　を一部改変して作成

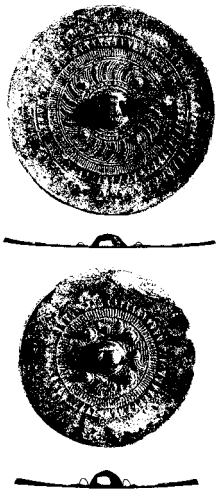
第３図　各地域における古墳の変遷



第４図　反町遺跡周辺における古墳の分布

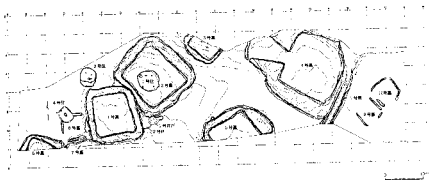


東松山市反町遺跡第８号墓

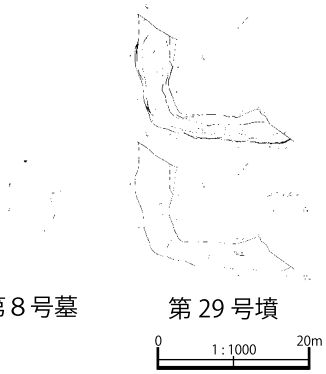


上尾市江川山古墳

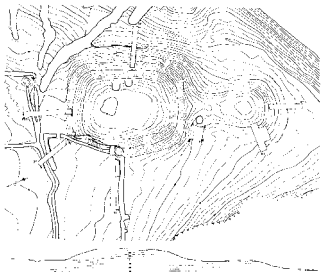
桶川市熊野神社古墳



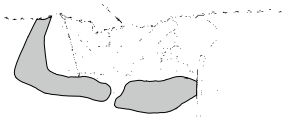
美里町南志渡川遺跡



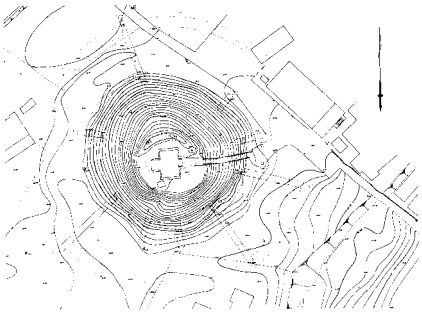
東松山市反町遺跡



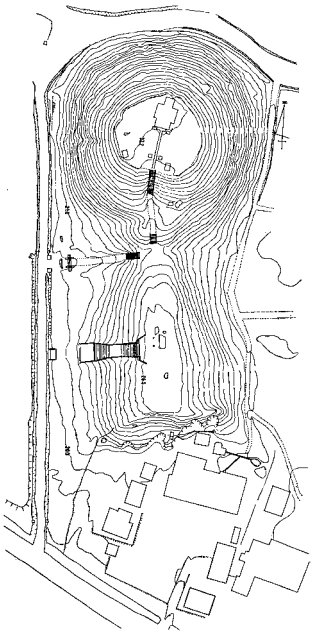
吉見町山の根古墳



東松山市諏訪山 29 号墳



桶川市熊野神社古墳



東松山市野本将軍塚古墳

0　1:2000　40m

第５図　古墳出土遺物と墳形の代表例

表１　埼玉の前期古墳

No.	地域	古墳名	古墳群・遺跡	所在	河川	立地	墳形	墳長	主体部	主な出土遺物
1	児玉	南志渡川遺跡1号墓	南志渡川遺跡	美里町駒衣南志	志戸川右岸	台地	方形周溝墓	15	不明	二重口縁壺、壺、坩、器台、高坏
2		南志渡川遺跡2号墓	南志渡川遺跡	美里町駒衣南志	志戸川右岸	台地	方形周溝墓	18	不明	二重口縁壺、壺、坩、器台、高坏
3		南志渡川遺跡4号墓	南志渡川遺跡	美里町駒衣南志	志戸川右岸	台地	前方後方形周溝墓	27	不明	パレススタイル二重口縁壺、小型壺、坩
4		南志渡川遺跡5号墓	南志渡川遺跡	美里町駒衣南志	志戸川右岸	台地	方形周溝墓	16	不明	二重口縁壺、壺、鉢
5		塚本山第14号墓	塚本山古墳群	児玉町下浅見	小山川左岸	丘陵	前方後方形周溝墓	20	あり	剣、高坏
6		塚本山第33号墓	塚本山古墳群	児玉町下浅見	小山川左岸	丘陵	前方後方形周溝墓	17	不明	壺、高坏
7		北堀新田前遺跡SZ2	北堀新田前遺跡	本庄市北堀新田前	小山川左岸	微高地	前方後方形周溝墓	23～	不明	二重口縁壺、S字状口縁小型台付甕
8		北堀新田前遺跡SZ3	北堀新田前遺跡	本庄市北堀新田前	小山川左岸	微高地	前方後方形周溝墓	15～	不明	小型台付甕
9		石蒔B遺跡第1号墓	石巻遺跡	岡部町後榛沢	小山川右岸	微高地	方形周溝墓	20	不明	甕、坩、高坏
10		石蒔B遺跡第2号墓	石蒔遺跡	岡部町後榛沢	小山川右岸	微高地	方形周溝墓	7	不明	台付甕
11		石蒔B遺跡第8号墓	石蒔遺跡	岡部町後榛沢	小山川右岸	微高地	前方後方形周溝墓	23	不明	坩
12		鷺山古墳	鷺山	児玉町下浅見	女堀川右岸	丘陵	前方後方墳	60～	不明	二重口縁壺、埦
13		村後遺跡周溝墓	村後遺跡	美里町下児玉	小山川右岸	自然堤防	前方後方形周溝墓	23.5	不明	二重口縁壺、パレススタイル壺
14		北堀前山1号墳	北堀前山	本庄市北堀	小山川左岸	丘陵	帆立貝式古墳？	40	不明	不明
15		北堀前山2号墳	北堀前山	本庄市北堀	小山川左岸	丘陵	方墳	41	粘土槨	壺、坩、刀子、鉄鎌、錐、鎗鉋、鉄剣片
16		長坂聖天塚古墳	諏訪山古墳群	美里町関	志戸川右岸	台地	円墳	50	粘土槨3基、木棺直葬3基	第1:菱雲文縁変形方格規矩鏡、櫛、刀子、直刀、剣、滑石製有孔円板など
17		川輪聖天塚古墳	諏訪山古墳群	美里町関	志戸川右岸	丘陵	円墳	38	不明	壺形埴輪
18		中道1号墳	白石古墳群	美里町白石	天神川左岸	丘陵	円墳	24	不明	壺形埴輪、壺、甕、高坏
19		万年寺つつじ山古墳	旭・小島古墳群	本庄市小島	利根川右岸	沖積地	方墳	25	不明	滑石製模造品(刀・鎌・斧など)
20		志渡川古墳		美里町駒衣	志戸川右岸	台地	円	41	不明	円筒・朝顔形・器財埴輪、壺、高坏、坩
21	大里	塩第1支群1号墳	塩古墳群	江南町塩	滑川左岸	丘陵	前方後方墳	35.3	不明	二重口縁壺、埦
22		塩第1支群2号墳	塩古墳群	江南町塩	滑川左岸	丘陵	前方後方墳	34	不明	小型短頸壺、有段口縁壺
23		塩第1支群7号	塩古墳群	江南町塩	滑川左岸	丘陵	方墳	13	不明	二重口縁壺
24		下田町12号墓	下田町遺跡	熊谷市大里町	和田吉野川左岸	自然堤防	方形周溝墓	21	不明	二重口縁壺、壺、台付甕、高坏、坩
25	比企	根岸稲荷神社古墳	古凍古墳群	東松山市古凍	市野川右岸	舌状台地	前方後方墳？	25～	不明	吉ヶ谷系底部穿孔壺
26		三ノ耕地遺跡1号墓	三ノ耕地遺跡	吉見町久米田	市野川左岸	自然堤防	前方後方形周溝墓	48.8	不明	二重口縁壺、高坏
27		三ノ耕地遺跡2号墓	三ノ耕地遺跡	吉見町久米田	市野川左岸	自然堤防	前方後方形周溝墓	30	不明	壺、高坏、底部穿孔小型壺
28		三ノ耕地遺跡3号墓	三ノ耕地遺跡	吉見町久米田	市野川左岸	自然堤防	前方後方形周溝墓	25	不明	壺
29		下道添2号墳	下道添遺跡	東松山市古凍	市野川右岸	台地	前方後方形周溝墓	24.6	不明	壺、坩、器台、高坏、甕
30		山の根古墳	山の根	吉見町久米田	市野川左岸	尾根上	前方後方墳	54.8	不明	高坏
31		諏訪山29号墳	諏訪山古墳群	東松山市西本宿	都幾川右岸	台地縁辺	前方後方墳	53	不明	二重口縁壺、高坏、器台、大廓式壺
32		柏崎天神山古墳	柏崎古墳群	東松山市小原	市野川右岸	台地縁辺	前方後方墳	57	「石室状の遺構」	銅釧(伝)、内行花文鏡(伝)、土師器
33		高坂8号墳	高坂古墳群	東松山市高坂	都幾川右岸	台地縁辺	前方後方墳？	20～	木炭槨？	捩文鏡、碧玉製管玉12点、鎗鉋
34		高坂諏訪山古墳	諏訪山古墳群	東松山市高坂	都幾川右岸	台地縁辺	前方後円墳	68	不明	不明
35		反町遺跡第8号墓	反町遺跡	東松山市高坂	都幾川右岸	自然堤防	方形周溝墓	9.2	不明	壺、甕、台付甕、高坏、鉢、赤色顔料
36		反町遺跡第29号墳	反町遺跡	東松山市高坂	都幾川右岸	自然堤防	方墳？	16.8～	不明	壺、甕、台付甕、高坏、鉢など
37		雷電山古墳	三千塚古墳群	東松山市大谷	滑川左岸	尾根上	前方後円墳	86	不明	円筒埴輪
38		野本将軍塚古墳	野本古墳群	東松山市下野本	都幾川左岸	台地縁辺	前方後円墳	115	不明	不明
39	入間	権現山2号墓	権現山遺跡	上福岡市福岡	新河岸川右岸	台地	前方後方形周溝墓	36	不明	高坏
40		広面遺跡SZ9	広面遺跡	坂戸市堀込	越辺川右岸	沖積地	前方後方形周溝墓	24～	不明	壺、器台、高坏、
41		中耕遺跡SR42	中耕遺跡	坂戸市善能寺	越辺川右岸	沖積地	前方後方形周溝墓	28	不明	有段口縁壺、坩、器台、高坏、台付甕
42		木曽免4号墓	木曽免遺跡	坂戸市小沼	越辺川右岸	沖積地	方形周溝墓	15(21)	不明	大型壺、二重口縁壺、坩、器台、鉢
43		北谷1号墓	北谷遺跡	坂戸市横沼	越辺川右岸	台地	方形周溝墓	15.5(21)	不明	壺(破片)
44		三変稲荷神社古墳	仙波	川越市小仙波	新河岸川	台地	方墳	23	木棺直葬？	碧玉製石釧、だ龍鏡、壺、
45	北足立	領家宮下1号墓	領家宮下遺跡	上尾市領家	荒川	台地	方形周溝墓	25～	不明	壺、広口壺、小型壺
46		熊野神社古墳	樋詰	桶川市川田谷	荒川左岸	台地	円墳	38	粘土槨	碧玉製儀仗、筒形銅器、鏡、刀剣、玉類
47		高稲荷古墳	新郷古墳群	川口市峯	荒川左岸	丘陵	前方後円墳	75	粘土槨？	大刀片
48		江川山古墳(イガヤマ コフン)		上尾市畔吉(伝)	荒川左岸	台地	円墳？	不明	不明	獣形鏡、捩文鏡、鉄剣、高坏、甕
49		殿山古墳		上尾市畔吉	荒川左岸	舌状台地	円墳	32	不明	壺、坩、鉄鎌

研究報告２

集落と土器

福　田　　聖

土器

考古学では、最も出土量が多い土器の文様や形の変化を用いて、年代ごとに型式、段階を設定し、時期を決定しています。

反町遺跡からは関東地方の古墳時代前期の土器型式である五領式土器が出土し、おおよそ３段階の変化を辿ることが分かりました（反町Ⅱ－１～３期）。本報告ではその時期区分に従って、各々の遺構、遺物の時期を示します。

１期は近畿地方で前方後円墳の造営が始まる３世紀後半から４世紀初頭、２期は埼玉県で出現期の古墳が造られ始める４世紀初頭から中葉、３期は４世紀中葉から後半になります。

土器の中心は、五領式土器を中心とする在地の土器です。東松山市周辺は、弥生時代終末には吉ケ谷（よしがやつ）式と呼ばれる非常に地域色の強い土器が使われていました。それが台付甕を用いる南関東的な五領式土器に変化したのは、古墳時代という新たな時代への大きな変革があったためと考えられます。

反町遺跡は、新たな時代の到来とともに開かれたムラですが、その住人は弥生時代以来の在地の人々が中心でした。弥生時代後期から施されてきた甕磨き手法によって、出土する台付甕の内側はツルツルに近い平滑な状態に仕上げられています。土器型式が変わっても、土器作りの基本的な方法は引き継がれているのです。反町遺跡の土器は丁寧な作りのものが多く、伝統的な方法を踏まえた上での、新たな時代の土器づくりが行われたと考えられます。

その一方で、反町遺跡からは、東海、北陸、畿内、あるいは中国地方に系譜が求められる壺や甕、高坏、小型壺が出土しています。こうした他地域の系譜を引く土器は、外来系土器と呼ばれています。それぞれの地域から運ばれてきた土器は外来土器と呼ばれ、僅かに東遠江（ひがしとおとうみ）産と考えられる粗くしっかりした縄文施文の壺と、駿河産の胎土が真っ白な大廓（おおぐるわ）式の大型壺があるのみです。

こうした他地域の系譜を引く土器は、北側を流れる都幾川によってもたらされました。

東海地方の土器には、愛知県域を中心とする東海西部系と静岡県域を中心とする東海東部系があります。

東海西部系は、外来系土器の中で最も多く出土しています。口縁部の断面形が「S」の形をしていることに因んで命名されたＳ字状口縁台付甕や、ギリシャ・クレタ島のミノア文化の華麗な壺になぞらえ命名された、白地に赤の山形文などの文様が施されたパレス・スタイルの壺が代表的なものです（第２図）。この両者は古墳時代前期に広く関東地方全体に分布し、東海西部の人々の頻繁な往来が推定されます。他にも伊勢湾型と呼ばれる櫛描文を施した二重口縁壺が見られます。ヒョウタンの形を模した瓢壺などはパレス文様が施されたものもあり、オリジナルへの強い志向が窺えます。

東海東部系には、大きく遠江と駿河の両地域の系譜が見られます。遠江系では櫛描の波状文が施された壺や菊川式の壺を模したと考えられる小型壺などが見られます。駿河系では前述の大廓式の大型壺の口縁部を模倣した壺があります。

近畿地方の系統を引くものとしてはタタキ甕があります。近畿地方では板で器面を叩く甕が弥生時代後期を中心に見られます。大和、河内、摂津では、古墳時代前期にはこうした手法が見られなくなりますが、山城では継続しています。埼玉県内では、反町遺跡のように古墳時代前期のタタキ

弥生土器から土師器へ

吉ヶ谷式

五領式

反町遺跡の土器

東海東部

縄文施文の壺

大廓式の大型壺

外来土器〈運ばれた土器〉

第１図　反町遺跡の土器（１）

外来系土器〈模倣した土器〉

第２図　反町遺跡の土器（２）

甕が多く、山城地域との交流関係が推定されます。

近畿地方の北部、丹後半島から北陸西部にかけて分布するエックス字形をした小型器台もまとまって出土しています。

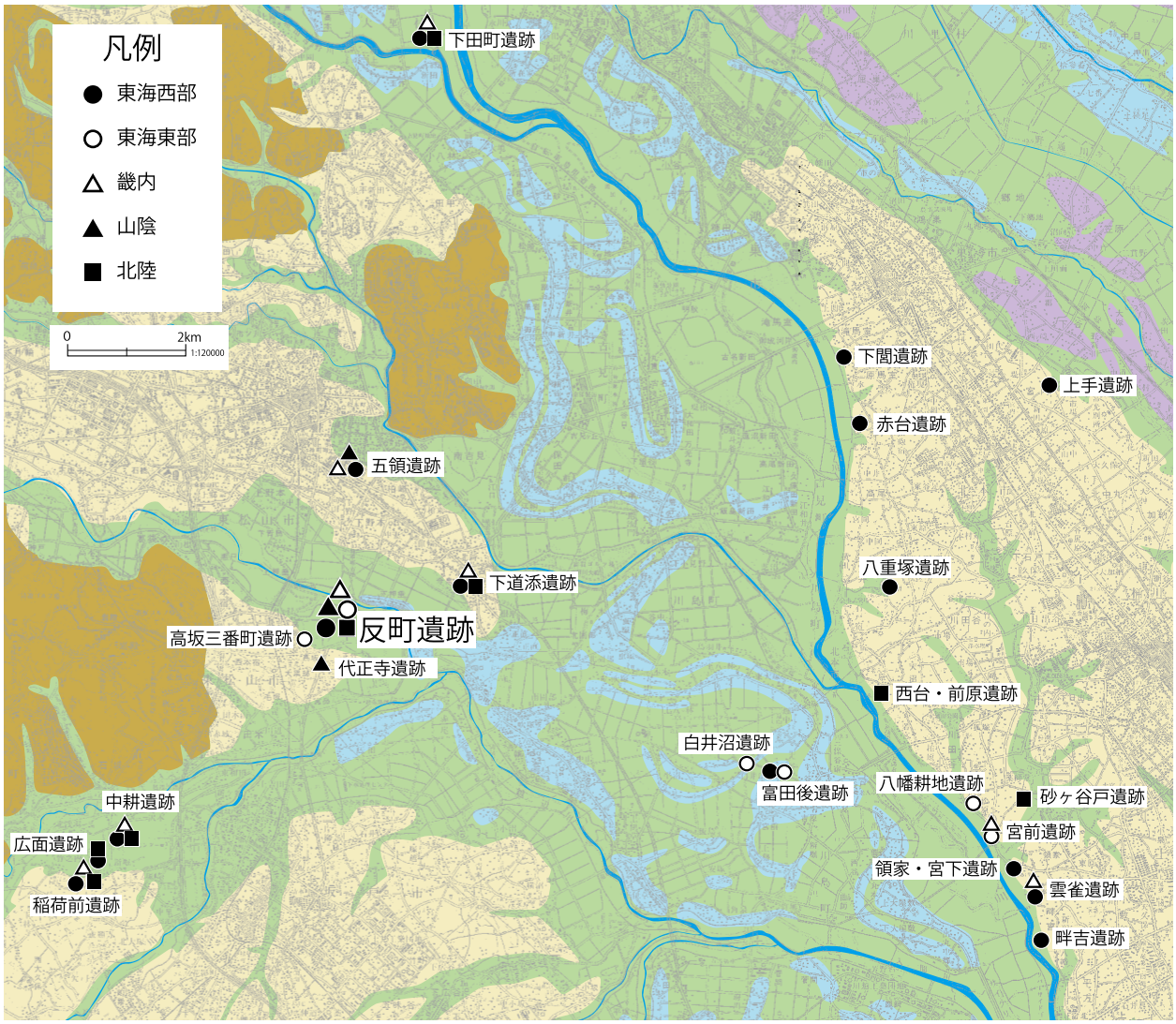
北陸系では、北陸地方全体でみられる高坏の坏部の上に大きく開く器受部を乗せた装飾器台、口縁部が「5」の字状の形態をした鉢、壺の蓋と、口縁の端が短く摘まれる上越を中心としたいわゆる千種甕（ちぐさがめ）が出土しています。反町遺跡の北陸系土器は五領式土器と同じ方法で作られており、北陸の本来の形とは異なるものになっています。

「5」の字状口縁の鉢には、吉備地域の鉢と同様のものがあります。直接ではないにせよ、かなり遠方との関係を推定させる資料です。

以上のように、反町遺跡では新しい五領式土器への交代とともに、東海、近畿、北陸の系譜を引く土器群が出土し、更に遠方との交流も推定されるなど、大々的な変革がありました。

第３図は、反町遺跡周辺の東海西部・東部、北陸、畿内、山陰の系譜を引く外来系土器の出土遺跡です。代正寺遺跡と合わせると反町遺跡からは全ての地域の土器が出土しています。複数の地域の土器が出土している遺跡はありますが、全てが揃う遺跡は県内に他にありません。

反町遺跡は都幾川による広汎な交流関係をもった地域の核となる遺跡なのです。河川に沿った水



第３図　外来系土器の出土遺跡分布図

はけの悪い土地に集落が造られる一因が、この都幾川を通した他地域との関係に求められます。

周辺の遺跡では、五領遺跡が100軒以上の住居が調査された有力な集落です。、反町遺跡にはない布留甕（ふるがめ）や屈曲口縁鉢などの近畿地方系の外来系土器が多く出土していますが、反町遺跡に多いタタキ甕が一点も出土していません。同じ近畿地方との間で異なるチャンネルを持っていたと推定されます。両者の違いは、当時の有力集落の他地域との交流の異なる方法を示しています。

また、第３図の複数の地域の外来系土器が出土している遺跡の周辺には、出現期古墳や大型方形周溝墓がみられます。有力な墳墓の造営に際しての他地域の人々の深い関与を窺わせます。

集落

反町遺跡からは、古墳時代前期の住居跡281軒が調査されています。関東地方の古墳時代前期の住居跡は、隅丸正方形、4本柱穴、炉跡は中央奥に1カ所という構造がほとんどで、貯蔵穴と呼ばれる土壙を備えている場合があります。反町遺跡の場合には弥生時代以来の長方形、多柱穴、複数炉の住居が継続し、それが方形主体へと変化します。

ここでは、長辺5.1m以上を大型、5.0m以下を小型とします。また60軒余りが古墳時代前期の住居跡と考えられるものの遺物が小さな破片であるため、年代が判断できませんでした。

反町遺跡の集落は、都幾川の小支流によって分割された自然堤防上に造られています。集落の西側から北側へ流れていた河川への主要な流れを、堰によって東側に導水しています。北側への流れを調整することによって水田を開き、経済的基盤を整備した後に集落が開かれたと考えられます。幾筋もの河川を挟んだ各地点に住居が造られ始めます。（13頁の図版参照）

Ⅱ－１期は22軒が該当します。遺跡の南側を除く全体に分布し、集落は早くから広範囲に展開していました。各住居跡群はかなり離れており、複数の集団によって集落が開かれます。

大型の住居は約半数の11軒で、弥生時代以来の長方形の平面形のものが多く見られます。

北側の一群は大型の住居跡で構成され、小型の住居跡とは軸方向を違えて分布しています。

Ⅱ－２期は85軒が該当します。遺跡全体に住居跡が分布し、南側は方形周溝墓群が造られています。

各住居跡群は引き続き一定の間隔が保たれます。大型の住居跡は33軒に上ります。大小の組み合わせではなく、規模が大きなもの同士、小さなもの同士で群を構成しています。

平面形は明瞭な長方形は減少し、方形もしくは隅丸方形になります。第234号のみは円形に近い平面形で、近畿北部系の器台がまとまって出土するなど、特異な住居と考えられます。

Ⅱ―３期は87軒が該当します。これまで遺構が多く認められた遺跡の南側や北東側では少なくなっています。

大型住居跡は40軒に上り、一定の間隔で分布しています。その周囲に小型の住居跡が造られ、大小の組み合わせが認められます。

また、北側の一群はⅡ－２期同様にほぼ大型住居跡のみで構成され、群の間で様相が異なります。

明瞭な長方形のものは少なく、方形もしくは隅丸方形の平面形が大部分になります。

反町遺跡は、長方形から方形、隅丸方形へ変化することからも明らかなように、弥生時代的な集落から古墳時代的な集落へと変遷します。水路を整備し、複数の集団が広い範囲で住居を造り始め、計画的に集落が開かれたと考えられます。

その後集落は拡大を続け、80件以上の大集落となるⅡ－２期には玉つくりが行われています。玉製作跡は、①北側河川の北側、②堰の対岸、③西側河川の南側の三箇所に大まかに分かれて分布し、集落内に製作跡が存在したと考えられます。堰の造営などで土木工事にも長けた反町の人々

は、木の伐採や加工も行い、木製品も生産していたと考えられます。また前述のように、伝統を踏まえた新時代の土器作りが行われ、多くの地域の外来系土器も作られています。

計画的な大集落である反町遺跡は、玉つくり、土器、木製品の製作において地域の中核となる集落です。合わせて、外来系土器からは多くの地域の人々の往来が考えられます。

反町遺跡の拡大に合わせて、南側の見上げる場所に反町で作られた玉が副葬された高坂８号墳をはじめとする高坂古墳群が、遠望する西側に諏訪山 29 号墳、諏訪山古墳を含む諏訪山古墳群が、そして北側に地域最大の 115m の規模を誇る野本将軍塚古墳が造られます。

第４図には主要な集落遺跡を掲載しましたが、20 軒以上の規模の大きな集落に伴って大規模な墳墓が造営されているのが分かります。特に出現期古墳はそうした集落が複数存在する箇所に営まれており、大規模集落と首長との密接な関係が窺えます。

反町遺跡はその中でも最大であり、しかも古墳造営に必要な土木技術、各手工業生産の中心です。河川を通して、頻々と他地域とも交流が行われていました。遺跡周辺に造られた埼玉県を代表する出現期の古墳群を支えた集落は、反町遺跡であったと考えられます。

第４図　集落遺跡分布図

研究報告３

灌漑施設と木器

矢　部　　瞳

発掘された木質遺物

反町遺跡では、約 1700 年前の人々が生活に使っていた木製品が多数出土しています。その数およそ 766 点にものぼります。遺跡が低湿地にあることから、腐食せずにこれだけ多くの木製品が残ったのです。

木で作った農具や工具、灌漑（かんがい）施設である堰（せき）が発見されており、これら木質遺物や構造物は当時の土地開発の様子や人々の暮らしを私たちに教えてくれます。

この報告では、木の利用を観察していくことで古墳時代の幕開けに展開していった反町遺跡の様子について考えていきます。

灌漑施設

反町遺跡の南方には都幾川が東流し、その流れを遺跡内に引き込んでいます。（13 頁反町遺跡周辺の推定河川流路図）引き込んだ流れを堰によってコントロールしていた様子が発掘調査によって明らかになりました（赤熊ほか 2011）（第１図）。

堰は北上する第 48 号溝跡（河川）に作られています。北上する流れに堰を設けることで、流路を東に変える役割を果たしています。（12 頁古墳時代前期全体図）

堰の構造を見てみると、後方部を２本の大木で支え、前面に３列の矢板を打ち込み、表面を草木・粘土・砂などで覆う「後方支持型」で作られています。堰は丸木や分割材など合わせて約 280 本もの部材から構成されています。

堰に使われた樹種をグラフ化したものが第２図です。ムクロジが 19％と最も多くを占め、コナラ節が 13％、アカガシ亜属が 12％と続きます。24 種類もの多様な樹種を用いたようです。

木の道具を作る際には、その道具に合う特徴を持った樹種を選ぶのが一般的です。例えば、鍬や鋤などの農具には、農耕に耐えられるように硬質なアカガシ亜属やコナラ節を選択する傾向があります。一方、堰では様々な樹種が混在し、樹種を選択している様子はうかがえません。報告書にも記述されているとおり、堰を構築するにあたって山のある一区画の木を根こそぎ伐採し、堰を作るその場所で製材して 300 本近い部材を作ったようです。

古墳時代の堰は全国でもあまり発見されていません。埼玉県内では熊谷市北島遺跡で弥生時代・古墳時代前期・古墳時代後期の堰が発見されています（吉田 2003、宅間 2005）。このうち古墳時代前期の堰は、流れを分水させる役割をはたしており、支流の先には水田が広がっていたようです。

反町遺跡では水田跡は検出されていません。しかし、北島遺跡同様、堰により東流した流れの先には水田が広がっていた可能性が考えられます。

堰の存在から考えられることは、水をコントロールして低地の開発を行い、生産力を拡大させていった様子です。生産力の拡大によって反町遺跡の人々は大きな経済力を持ったことでしょう。

木製品

反町遺跡で出土した木の道具は合計 766 点です。その内容は、農具 20 点、工具 10 点、容器 11 点、粗杢（そだ）３点、敷物３点、建築材 43 点、杭 125 点、加工木 209 点、堰構造材 342 点です（第３図）。このほか自然木 63 点が出土しています。

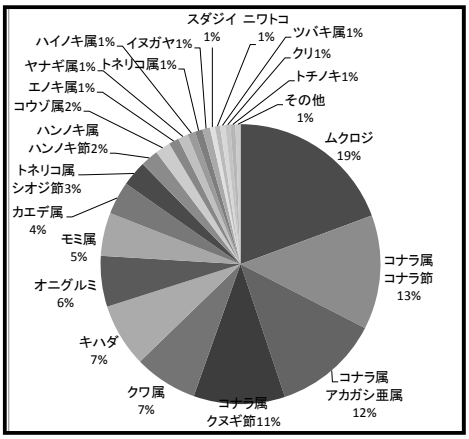
（１）農具

農具では鍬、鋤、臼などが出土しています。

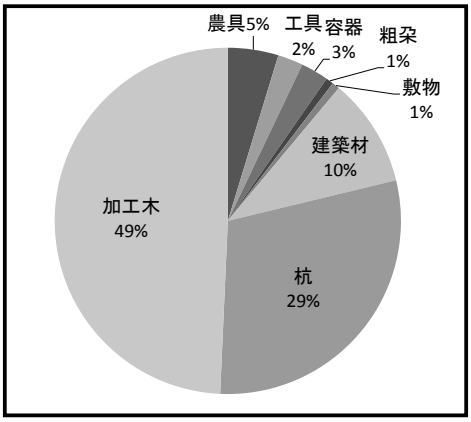
鍬には様々な形があります（第６～９図）。

第６図はスリット入り曲柄平鍬といって、中央

第１図　堰跡全景



第２図　堰構造材の樹種（福田 2011）



第３図　木製品構成比

第４図　鍬未成品

第５図　樹皮紐

に切り込みが入っているのが特徴です。これは、長野県北部にみられる形態です。第７図はナスビ形曲柄平鍬（まがりえひらぐわ）といって、近畿・東海地方から東日本に伝播したと考えられているものです。第８図は直柄広鍬という鍬で、関東地方でよくみられる形態の鍬です。このように、近畿・東海地方や中部地方など様々な地域の情報を取り入れて鍬を製作していたようです。

第 48 号溝跡からは臼（第 10 図）が出土しています。これは竪杵を使って籾摺りをするための道具で、重く硬質な特徴を持つケヤキを使っています。胴部に付く把手状の造り出しは装飾性が高いことから装飾と考えられています（村上 1996）。このような細かな削り出しのできる高い技術を持った木工職人がいたことが考えられます。

鍬の樹種にはイチイガシが使われていますが、イチイガシは関東地方の南岸にしか生育しないことから、原材料または製品が搬入された可能性が考えられています（能代 2011）。

第４図は溝跡から出土した製作途中の鍬です。第５図は木の部材を綴じる時に使う樹皮紐の材料で、樹皮巻というものです。第４・５図の出土からは、木の道具を集落で製作していたことが分かります。

農具の形や使用している木の種類からは、モノ・情報の流通について理解することができます。他地域から木製品製作に関する情報を得て、時には材料を搬入して木器生産を行い、生産力を拡大していったのでしょう。

（２）ウルシの木

第 48 号溝跡の中からウルシの自然木が出土しています。漆の掻きとり跡はありません。隣接する東松山市城敷遺跡では漆を掻きとった跡のある木が出土しています。（富田・山本 2010）ウルシは日本には自生しないことから、漆掻きのための栽培が考えられています。（能代ほか 2009）

これら農具やウルシの木から分かるのは、漆の木をはじめとして樹木の管理を行い、木製品を製作・消費して生産活動を行っていた人々の姿です。

反町遺跡の古環境について

遺跡から出土した木器そのものを研究するだけでなく、周辺科学と合わせて研究することで分かる事があります。

反町遺跡の環境はどのようなものだったのでしょうか。出土した自然木の種類を調べることで、どのような木が生育していたのかを知ることができます。分析の結果をグラフ化したものが第 11 図です。

エノキ属・ムクロジ・クワ属・カエデ属・キハダ・ムクノキといった日当たりのいいところに生育する二次林の構成樹種が優先していることから、人為的な伐採を繰り返した結果、二次林が形成されたと考えられています（能代ほか 2009）。

このほかに特徴として挙げられるのは、コナラ属アカガシ亜属の多さです。コナラ属アカガシ亜属は農具のほか堰の構築材に多数使用されていることから、周辺で自生していたことが考えられます。コナラ属アカガシ亜属は狭山丘陵での生育が分かっていますが、反町遺跡周辺のような平地で生育することはまれであることから、樹木の生育に関して人為的な要因があった可能性が考えられています（能城ほか 2009）。

反町遺跡の人々は、このような周辺環境や木の特徴を知り、それを生かす技術を持っていたことが考えられます。

まとめ

ここまで「木」からみた反町遺跡について報告をしてきました。

東海地方や中部地方から技術を獲得しながら、農具などを製作して生産活動を行い、灌漑技術を導入して堰を作り水田を作り、権力の基盤となる生産力を高めていったと考えられます。

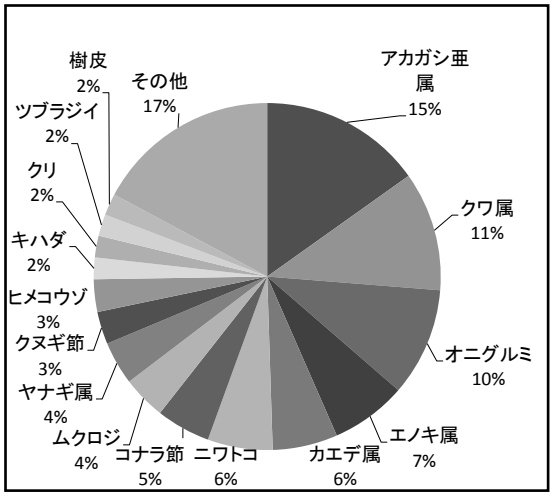
第６図　スリット入り平鍬

第７図　ナスビ形鍬

第８図　平鍬

第９図　横鍬

第 10 図　臼



第 11 図　自然木の樹種（福田 2011）

研究報告４

玉つくり

上 野　　真 由 美

古墳時代の幕開けは、日本の国家形成の原点であると言えます。そしてそれは、畿内の大型の前方後円墳に象徴される大和政権の勢力拡大と切り離すことができないこととも言えます。

各地での前方後円墳出現に象徴される祭祀の統一と、そこで用いられる祭具としての玉類の需要という点から、ここでは反町遺跡で発見された玉つくりについて考えてみます。

埼玉における大和政権との関係は、５世紀には稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣の銘文に見られるように、埼玉を含む「東国」が、大和政権と従属的な関係であったことがわかっています。

では、そこにいたるまでの古墳時代前期における埼玉（反町遺跡）の有力者と大和政権との関係はどうだったのでしょうか。

反町遺跡では、日本で最も古い水晶製勾玉を作った製作跡が見つかりました。「玉」は祭祀を司るうえで大きな意味合いを持つものです。その「玉」の製作跡にこそ、古墳時代の幕開けを知る大きなヒントがあったのです。

水晶製勾玉の製作跡

反町遺跡からは、２軒の玉製作跡が発見されました。そのうちの１軒である第 48 号住居跡で、水晶製勾玉を製作していました。

反町遺跡玉製作跡（第 48 号住居跡）

第 48 号住居跡からは、水晶製の遺物が大量に見つかりました。発見されていた遺物は、勾玉製作途中の未製品、製作時に発生した剥片、砕片です。床面には細かな水晶の破片が多数突き刺さるように残されていました。製作跡は住居跡として調査されましたが、遺物が発見された状況からは、玉を製作する製作跡であったと考えられます。

また、住居跡の北西コーナーの床面上には、３点の水晶製勾玉未製品がまとめて置かれた状態で出土しました。

水晶製勾玉の完成品は、その後使用するものの手に渡ったわけですから、製作跡からは発見されませんでした。

反町遺跡勾玉未製品出土状況（第 48 号住居跡）

反町遺跡の玉製作跡発見から半年後、今度は桶川市前原遺跡からも古墳時代前期の水晶製勾玉の製作跡が発見されました。

第２号住居跡からは、反町遺跡と同様に水晶製勾玉製作途中の未製品、製作時に発生した剥片、砕片が発見されました。そして第２住居跡からも、床面上に水晶製勾玉の未製品がまとめて置かれた状態で発見されました。15 点が二段に重ねて置かれ、そのうち１点はメノウ製でした。

前原遺跡で製作跡が発見されたことから、両者

前原遺跡玉製作跡（第２号住居跡）

前原遺跡勾玉未製品出土状況（第２号住居跡）

を比較して分析することで、勾玉の製作工程を明らかにすることが可能になりました。

製作工程（第１図）

水晶製勾玉の製作工程については、残された製作途中の遺物から以下のように考えることができました。

1　原石を探索、採取して運搬する未調整の工程
2　原石を略Ｄ字形、略板状に加工していく剥離工程
3　Ｄ字形からＣ字形に成形していく敲打（こうだ）・粗目（ざらめ）研磨（けんま）工程
4　勾玉の孔を穿つ穿孔工程
5　完成品と同形の勾玉形に整形する敲打・粗目研磨工程
6　表面を研磨し光沢をつける光沢研磨工程

完成された勾玉は使用するため持ち出されるので残されていません。

また、それぞれの工程の遺物を、作業途中の「途上品」、作業が終了した「終了品」、状態な良好ではないため一旦工程から外した「保留品」、製作途中に破損した「破損品」、不要となった剥片類などの「廃棄物」に分類しています。

この製作工程を分類した過程で、さまざまな特性が見えてきました。

残された勾玉未製品から見えてきた特性

①水晶を加工する技術と製作者

反町遺跡第４８号住居跡は、現在のところ日本最古の水晶製勾玉の製作跡です。それでは、反町遺跡が水晶製勾玉製作の発生の地なのでしょうか。

反町遺跡、前原遺跡ともに水晶を原石として勾玉に加工する工程は同じ工程をたどり、また敲いて加工することが特徴的でした。関東周辺には水晶製勾玉製作の技術の伝統はなく、古墳時代前期に忽然と製作跡が現れたことになります。反町遺跡、前原遺跡では製作工程や未製品形状などから、初めて水晶製勾玉を作ったのではない、つまり製作したのは水晶の性質をよく知っていた熟練製作者であると推定されます。このことから、すでに水晶製勾玉を作る技術を持っている製作者が他の地方から来たと考えられます。

②工程によって大きく変化する未製品の出土量

各工程に分類した未製品ですが、１～３の工程では各工程の途上品や工程が終了した段階の終了品、再利用が可能な保留品も残されていました。ところが、４～６の工程のものは勾玉の一部が残されていた破損品のみが残されるもので、途上品や終了品は残されていませんでした。

ではなぜ、加工が可能な１～３の工程品が多く残されたのでしょうか。反町遺跡や前原遺跡での勾玉製作の目的が終了したのなら、そのまま製作者が持って移動することの可能な量です。

③使用されなかった原石

反町遺跡からは出土しませんでしたが、前原遺跡からは原石が出土しました。小さくて使用できなかったものもありましたが、勾玉製作が可能なものもありました。

これも不思議なことです。①と同様、持ち帰れば次に使用が可能であったわけです。また、熟練した技術を持っている製作者が、使用不可能な原石をなぜ採取したのでしょうか。

④まとめて置かれたままの未製品

反町遺跡、前原遺跡の製作跡である住居跡からはまとめて置かれた未製品が出土しました。勾玉製作途中のもので、続けて勾玉を製作することが可能なものでした。

まとめて置かれた未製品は、ある一定の製作工程までは終了品を貯めておくという製作工程の様子が見られる貴重な出土状況ですが、それが残されていることについては、②と同様どうして持ち出さなかったのかという疑問が残ります。

⑤少数しか発見されない製作跡

水晶製勾玉製作跡については、両遺跡とも１軒だけが発見されました。大量に水晶製勾玉の未製品や剥片が検出されましたが、一つ一つは小さいものなので、全体を合わせても１人でも持ち運び可能な量と考えられます。１軒のみの製作跡や総出土量からすると、反町遺跡、前原遺跡ともに水晶製勾玉製作は短期間であったと考えられます。

⑥運ばれた原石

使用された水晶は、「草入り水晶」という特徴的な夾雑物が入っており、原産地は山梨県の竹森である可能性が高いと考えられます。また、良質な水晶の原産地は埼玉県内からは見つかっておらず、そのことからも原産地は山梨県であると考えられます。

特性の意味するもの

前項の①から考えると、製作者は他の水晶を加工する技術のある地域から来たと考えられます。反町遺跡と同時期以前の水晶を加工した遺跡は、水晶が産出する丹後半島に近い弥生時代の京都府奈具岡（なぐおか）遺跡があり、反町遺跡や前原遺跡に来た製作者はその周辺から来た可能性が高いと考えられます。普通に考えれば、反町遺跡で玉を必要とする有力者が製作者を招き、それに応じて製作者が反町遺跡や前原遺跡に来たと考えられます。

しかし、そう考えると②～⑤の事象と整合しない部分が多いことがわかります。

まず、途上品、終了品とした、加工すれば使用できる未製品が残されていることです。製作者がある程度自由であるとすれば、当然持ち帰って次に使用することが自然です。故意に放棄されたとしか考えられないのです。

次に、原材料の中に使用が不可能なものが存在していることです。製作者が自ら採取したのであれば､そのような原石は選択しなかったはずです。また、製作者がどうして山梨県の産地を知っていたのでしょうか。

そして、残された遺物の量からみても、ごく短期間、滞在していたと考えられます。ある程度完成品ができあがった時点で、未製品をすべて残して退去していたのです。

これらのことは何を意味するのでしょうか。

古墳時代前期の大和政権との関連

水晶製勾玉の製作者は、直接原材料を採取することもなく、完成品をある程度製作すると道具以外の玉に関係するものをすべて置いて退去していたことになります。このことから、製作者が大きな規制を受けていたことがわかります。そして、招いた側（反町遺跡や前原遺跡の有力者）が製作者に対して、そのような権力を行使できたとは考えにくいでしょう。

つまりこれらのことは、製作者を自由に動かすことができる権力が別に存在したことを示しているのではないでしょうか。そうした権力者は丹後周辺を治め、水晶製作者を派遣できる力を持っていたと考えられます。加えて原産地から原石を入手することが可能な力を持った存在であったことも考えなくてはなりません。

そのような条件に見合う古墳時代前期の大きな権力者といえば大和政権に他ならないのではない

でしょうか。

大和政権は前方後円墳という特徴的な形態の墳墓を持って３世紀に突如姿を現します。古墳に祭られた副葬品には鏡・玉・剣・石製品の他、鉄製農耕具が見られます。これらの副葬品に見られる物こそが、大和政権が掌握していた物で、権力を安定させたい地域の有力者が欲していた物、そのものだったと考えられます。

反町遺跡における有力者にとって、耕地を増やして、周囲の勢力を取り込みさらに大きな勢力となるための不可欠なものが、大規模な土木工事を可能にする鉄製農耕具と、自然を統御する強力な祭祀であったのです。そして大和政権も、その支配を広げるために、それらをセットとして地域の有力者に与えていたのではないでしょうか。

反町遺跡の玉つくりの意義

ではなぜ大和政権は、反町遺跡の有力者に勾玉そのものを与えず、製作者を派遣したのでしょうか。製作者を派遣すること自体が、古墳時代前期の畿内と地域との関係性、そして地域と畿内との関係性を現していると考えられます。

「玉」は祭祀を司るうえで、大きな象徴といえます。それを、他人に与えることは与えた本人が祭祀の主催者であることに通じ、有力者にとって権力の拡大や、地位の保全のために重要な道具であったと言えます。また、その「玉」を自分の手で生み出すこと、つまり製作することは祭祀を司っていることを証明することでもあったのです。

一方、大和政権の関東支配はまだ表面上に現れず、ゆるやかな協力関係を築いていたと考えられます。しかしながら、鉄と祭祀を掌握しつつある大和政権は、それらを使って関東支配を試みていたとも考えられます。同じ祭祀（「玉」）を与えることは、その大きな第一歩となったのでしょう。そして与えた地域の有力者が、「玉」を利用して周辺の勢力を取り込んでいくことは、大和政権の祭祀を普及していく行為に等しく、王権にとって都合の良いことだったのだと考えられます。

しかしながら、玉つくりの製作者が、派遣した地域で定住し、玉を作り続けていくことは、その価値を下げ、大和政権の特別性を失わせる可能性があります。だからこそ、玉つくりは短期間であり、限定的であったのです。それは地域の有力者にとっても同様で、「玉」は希少性がなくてはなりませんでした。だからこそ、一定の量の勾玉が製作されたら、それ以上の勾玉、たとえ未製品であっても決して持ち出すことが許されなかったのです。また、産地を製作者に知られることも同様な理由で許されなかったと考えられます。そのため製作者と採取者は別であったのでしょう。

そのような両者の思惑が一致し、反町遺跡に水晶製勾玉の製作者が派遣され、玉つくりが行われたと考えられます。

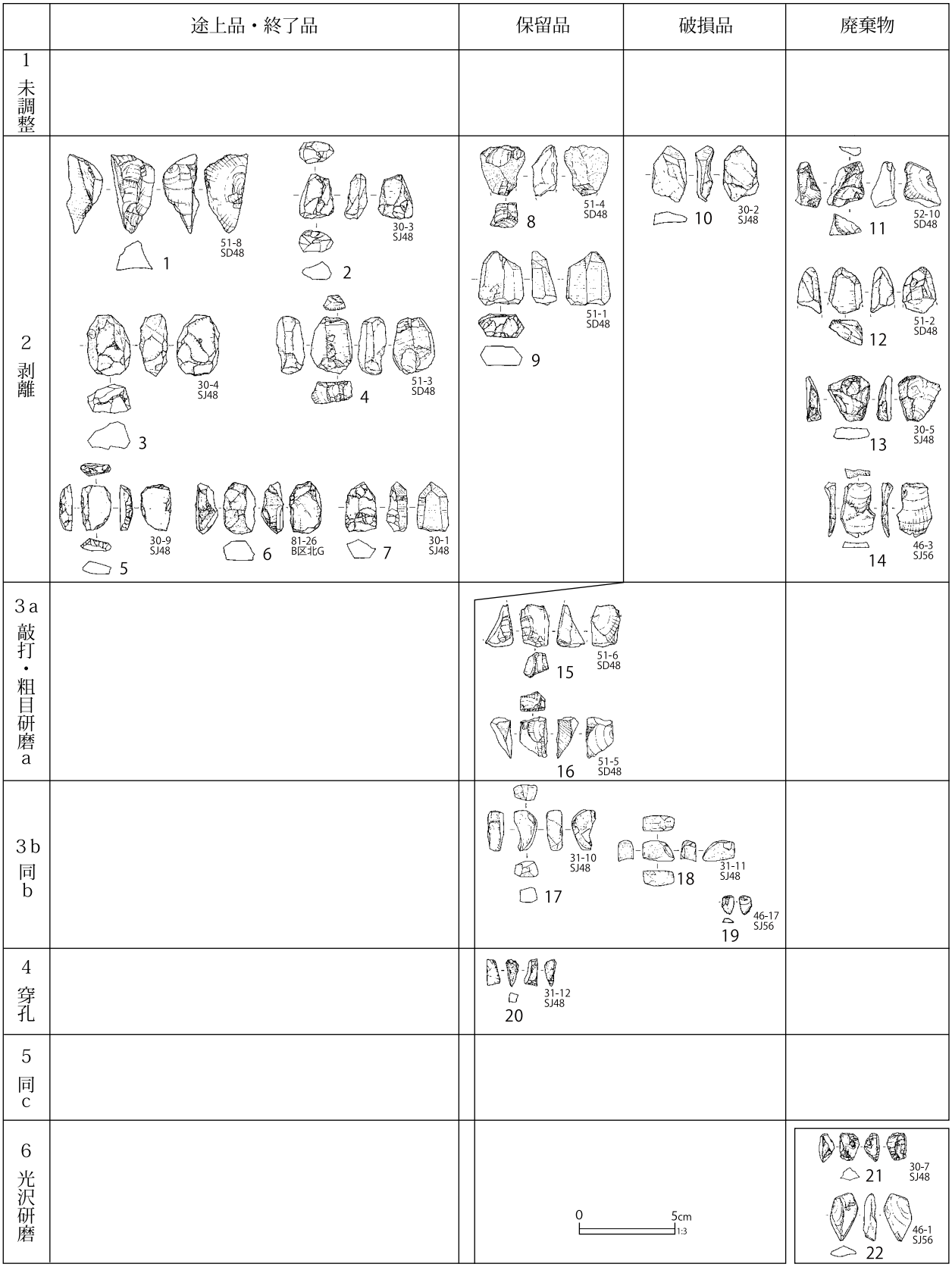
大和政権の国家形成戦略

反町遺跡の有力者にとって、利用するはずの大和政権の「玉」は、実際には大和政権にとっては、地方戦略の重要な手段であったわけです。その戦略の成果は、反町遺跡の北側に位置する前方後円墳である野本将軍塚古墳の築造にみることができるのではないでしょうか。

そして、「東国」が同盟的な関係から、従属的な関係になると玉つくりの製作者は派遣されることはなくなり、「玉」は大和政権から直接地域の有力者に与えられたと考えられます。

反町遺跡で発見された水晶製勾玉の製作跡から、古墳時代前期の大和政権の地方戦略を類推することができました。大和政権は、鉄においても、同様な戦略を行っていたことが推測されます。

またその戦略は結果として、国家形成に向けての戦略となって行ったと考えられます。そして古墳時代前期から約 100 年後、冒頭の辛亥銘鉄剣の銘文に見られたように、畿内の王権に従属する時代となるのです。



第１図　反町遺跡主要遺物（上野・大屋 2014　第８図転載）

水晶製勾玉・未製品

緑色凝灰岩製管玉・未製品

総括

反町遺跡と古墳時代の幕開け

赤　熊　浩　一

平成 17 年から平成 20 年にかけて発掘調査した、埼玉県東松山市反町遺跡の調査成果をもとに古墳時代の幕開けについて考えます。

反町遺跡は、松山台地と高坂台地に挟まれた都幾川の沖積低地に広がる遺跡です。発掘調査によって、今から約 1,700 年前の古墳時代前期の大規模な集落跡が見つかりました。発見された「集落」・「土器」・「玉つくり」・「灌漑施設」・「木器」は、この地域の歴史を考える上で、大きな特徴と言えます。また、遺跡周辺の「古墳」には、前方後方墳や前方後円墳などをはじめとした古墳群が存在します。この地域では、埼玉（さきたま）古墳群より 200 年も前から古墳が造られていました。

集落は、これまで丘陵や台地上に営まれていましたが、沖積地の開発や河川交通の発達により河川流域に営まれるようになります。都幾川に隣接した沖積地に造られています。古墳時代前期の集落は、複数の住居跡群が流路の周辺に存在し、住居跡は 281 軒が調査されました。集落は規模を拡大しながら複数の単位集団によって営まれていたようです。住居跡の形態は、長方形から方形に移行し、弥生時代から古墳時代への変化を示しています。

土器は、在地の弥生時代の吉ケ谷式土器から古墳時代の五領式土器へと変化します。刷毛目をもつ台付甕が基本ですが、弥生時代的な土器調整法である磨きの手法が色濃く残される地域でもあります。

反町遺跡で見られる五領式土器には、畿内系土器と伊勢湾地域の東海系土器が見られます。この二つの地域は、関東地方の土器に強い影響を与えたことがわかります。畿内系の叩き甕は、東日本各地に影響を与え、関東地方でも出土します。また、伊勢湾系のＳ字甕、伊勢湾型二重複合口縁壺、パレス式土器の壺や高坏なども見られます。さらに、駿河の東海東部系壺、大廓式土器、北陸系の高坏、近江・播磨・山陰系の甕なども見られます。

各地域の土器が関東地方に波及していることは、人の移動があったことを物語っています。伝統的な弥生社会をベースに中核的な古墳時代集落が形成されたと考えられます。そこには、東京湾岸地域・東海地域・畿内地域との接触により、古墳時代社会の新しいネットワークが構築されてい

各地域の影響を受けた外来系土器

る様子がわかります。

灌漑施設としては、集落の周囲を巡る河川から堰跡が発見されました。新たな土木技術の導入により谷戸を利用した伝統的な水田から、用水路を整備した水田開発を進め、耕地の拡大と農業生産力が飛躍的に高まったと考えられます。

木器は、東海系の木製品、大型建物などの建築部材が数多く出土しています。これらの材質を調べたところ、この地域で自生していない、東海以西に生育するイチイガシが多く見られるのが特徴です。このことは、イチイガシの製品が搬入されたのか、あるいは、原材料が搬入され、この地域で木器製作が行われたことが考えられます。

玉つくりの工房では、水晶・緑色凝灰岩・瑪瑙の石材を使った玉製作が行われ、玉を磨く結晶片岩の玉砥石や砂岩質の置き砥石・鉄製の針・はずみ車などの工具も見つかっています。また、別の工房からは、ガラス小玉鋳型も出土し、ガラス小玉の製作も行われていたことがわかりました。遺跡に隣接した高坂台地上に造られた前方後方墳の高坂第８号墳主体部からは水晶製勾玉、緑色凝灰岩製管玉、捩文鏡が副葬されていたことから、玉の製作地と供給地の関係が明らかになってきました。古墳時代前期の水晶製勾玉は、山梨県、長野県、千葉県など東日本を中心に分布し、朝鮮半島でも出土しています。

ガラス小玉鋳型は、東京、千葉で４例の出土が報告され、福岡や朝鮮半島でも出土しています。いずれも、古墳時代前期の特殊な現象ですが、共通しているのは、半島以外では、関東地方にしか分布していないことです。このことは、半島の影響を強く受けた工人が関東地方に存在していたことになります。このように、玉つくりは、工人が派遣され、在地生産を行っていたことがわかります。

大和政権は、東国支配の拠点となる地域に先進技術をもたらし、在地勢力と融合を図ったと考えることができます。その背景には、大和政権による支配構造のあり方が垣間見られます。

古墳は、反町遺跡周辺の根岸稲荷神社古墳が３世紀前半に築造されます。比企地域は、前方後方墳が多く造られる特徴があり、政治的なまとまりが見られ、卓越していたことがわかります。また、反町遺跡を囲む高坂台地上には諏訪山古墳群や高坂古墳群などが形成され、都幾川を挟んだ対岸の台地先端には、この地域の統率者としての存在をうかがわせる県内第二の規模をもつ全長 115 m の野本将軍塚古墳が存在します。

大和政権は、関東地方に対し、どのように政治的支配を展開したのか、その手掛かりは、反町遺跡の「古墳」・「集落」・「土器」・「灌漑土木施設」・「木器」・「玉つくり」などの現象から見えてきました。大和政権を背景とした人・工人・集団の移動が在地社会と接触することにより、新しい社会秩序が図られたと考えられます。大和政権は、伊勢湾から東海地域を含む太平洋沿岸から東京湾岸に至る地域を介して、関東地方の統治を行っていったのでしょう。また、朝鮮半島の影響をもつ人の入植も想定できます。そして、前方後方墳から前方後円墳への移行こそが、大和政権による実効支配の完成ではないでしょうか。ここに弥生社会から古墳時代の幕開けが見えてきました。

高坂古墳群の第８号墳主体部から水晶製勾玉、緑色凝灰岩製管玉が出土

東松山市教育委員会提供

引用・参考文献

赤塚次郎　1992 「東海系のトレース―3・4 世紀の伊勢湾沿岸地域―」『古代文化』第 44 巻第 6 号

赤塚次郎　1996 「前方後方墳の定着―東海系文化の波及と葛藤―」『考古学研究』第 43 巻第 2 号

甘粕　健　1976 「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武蔵考古学資料図鑑』

上野真由美・大屋道則　2014「水晶製勾玉の製作とその工程」『研究紀要』第 28 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上野真由美・田村朋美　2012「埼玉県反町遺跡出土のガラス小玉とガラス小玉鋳型について」『研究紀要』第 26 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上野真由美・宮井英一　2010 『前原／大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 373 集

卜部行弘　編　2004 『前方後方墳―もう一人の主役―』特別展図第 62 冊　奈良県立橿原考古学研究所

大阪府近つ飛鳥博物館　2009 『卑弥呼死す　大いに冢をつくる』 平成 21 年度春季特別展図録

大阪府近つ飛鳥博物館　2014 『箸墓以降―邪馬台国連合から初期ヤマト政権へ―』平成 26 年度秋季特別展図録

大塚初重　2012 『邪馬台国をとらえなおす』 講談社現代新書

金井塚良一　1979 「比企地方の前方後円墳―北武蔵の前方後円墳の研究（1）―」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第 1 号　埼玉県立歴史資料館

河野一隆　1997 「奈具岡遺跡（第７・８次）」『京都府遺跡調査概報』76　京都府埋蔵文化財調査研究センター

河村好光　2010 『倭の玉器　玉つくりと倭国の時代』 青木書店

菊地　真　2009 「都幾川下流・早俣低地の埋没微地形と遺跡立地」『人文科学研究』第 125 集　新潟大学人文学部

君島勝秀　編　2010 『「稲荷山」出現以前の古墳』 埼玉県立さきたま史跡の博物館

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2014 『さいたま埋文リポート 2014（年報 34　平成 25 年度）』

坂本和俊　2013 「古墳築造の基盤となった集落と首長居館」『埼玉の文化財』第 53 号　埼玉県文化財保護協会

佐藤幸恵　2012 「東松山市高坂古墳群の調査」『第 45 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館

塩野　博　1984 「埼玉県の古式古墳―稲荷山古墳以前の北武蔵―」『埼玉県史研究』第 13 号

島根県立古代出雲歴史博物館　2009 『輝く出雲ブランド―古代出雲の玉作り』

下垣仁志　2010 『三角縁神獣鏡研究事典』 吉川弘文館

城倉正祥　2013 「北武蔵の大型墳と首長層の動向」『埼玉の文化財』第 53 号　埼玉県文化財保護協会

高橋一夫　1989 「前方後方墳出土土器の研究」『研究紀要』第 6 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

宅間清公　2005 『北島遺跡ＸⅠ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 303 集

都出比呂志　1991 「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343　日本史研究会

富田和夫・山本　靖　2010『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 369 集

利根川章彦　2012 「『埼玉の古墳出現』断章」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 6 号

沼津市教育委員会　2012 『高尾山古墳発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第 104 集

能城修一・佐々木由香・村上由美子　2009 「反町遺跡出土木材の樹種」『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 361 集

能城修一　2011 「反町遺跡出土木材の樹種」『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 380 集

比田井克仁　2010 「弥生後期社会の系譜類型と古墳時代への移行」『古代』第 123 号

福田　聖　2011 「関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡」『研究紀要第 25 号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田　聖　2011 「埼玉県における古墳時代前期の植生と木器の樹種選択」『埼玉考古』第 46 号　埼玉考古学会

増田逸朗　1997 「古墳出現期の北武蔵―前方後方墳成立の要因―」『調査研究報告』第 10 号　埼玉県立さきたま資料

村上由美子　1996 「杵と臼の変遷について」『滋賀考古』第 15 号

吉田　稔　2003 『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 286 集

若狭　徹　2007 『古墳時代の水利社会研究』 学生社

反町遺跡に関する報告書

『反町遺跡Ⅰ』 2009　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 361 集

『反町遺跡Ⅱ』 2011　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 380 集

『反町遺跡Ⅲ』 2012　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 393 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立 35 年記念事業　平成 26 年度ほるたま考古学セミナー

見えてきた!! 古墳時代の幕開け ―東松山市反町遺跡を中心に―

平成 27 年 2 月 1 日発行

編集・発行 / 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒 369-0108　埼玉県熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1

TEL　0493-39-3955

http://www.saimaibun.or.jp